OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	懐徳堂を知るための本
Author(s)	懐徳堂研究センター
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24995
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

懐徳堂を知るための本

懐徳堂研究センター

前　言

はじめに

平成 21 年（2009）5 月、大阪大学文学研究科の「懐徳堂センター」が改組され、新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

研究センターの仕事は多岐にわたるが、懐徳堂資料の調査、懐徳堂の広報活動も重要な業務である。懐徳堂の歴史と魅力とをどのように伝えていくか。これが、大きな課題の一つである。

そのため、研究センターでは、本年度、主として二つの方向から活動を進めてきた。一つは、デジタルコンテンツの制作である。懐徳堂研究センターには、資料を展示するスペースがない。また、貴重資料を保管しておく場所もない。そこで、デジタルコンテンツを制作し、インターネット上での公開に努めたのである。

これまでも、懐徳堂デジタルコンテンツとして、「懐徳堂絵図屏風」「懐徳堂『左九羅帖』」「懐徳堂印」「懐徳堂四書」などを制作してきたが、今年度は、新たに「天図シミュレーション」と「中井履軒『孟子逢原』」を公開した。

「天図シミュレーション」とは、中井履軒が作成した天体模型「天図」をインターネット上で操作できるようにしたもので、天体の軌道を表す円盤を回転させることにより、この模型の宇宙観を知ることができる。

また、「中井履軒『孟子逢原』」は、これまでほとんど公開されてこなかった中井履軒の『孟子逢原』全ページをデジタルブックとしたもので、実際にページをめくるようにして全ページをインターネット上で閲覧できる。

こうしたデジタルコンテンツ制作と並行して、既刊の懐徳堂関係書の整理を進めた。そして、それらの概要を「懐徳堂を知るための本」としてまとめるという企画を立てた。

ここで思わぬ事態が起きた。平成 22 年度の授業「漢籍資料学演習」（湯浅邦弘担当）の受講生が、懐徳堂関係の書物を持ち寄り、それを紹介するという読書会が行われたのである。そこで、この成果をまとめ、受講生の目線から懐徳堂を見る、という画期的な本ができあがった。これを懐徳堂研究センターの本年度第二の成果として公開したい。

この小冊子が懐徳堂への誘いの役割を果たすことができれば幸いである。

平成 22 年 3 月 1 日

懐徳堂研究センター長
大阪大学文学研究科教授
湯　浅　邦　弘

目　次

前言……1

目次……2

1．研究・論文・報告書……4

『懐徳堂―１８世紀日本の「徳」の諸相―』……4

『懐徳堂朱子学の研究』……6

『懐徳堂文庫の研究　共同研究報告書』……7

『懐徳堂文庫の研究 2005　共同研究報告書』……9

『懐徳堂研究』……9

2．一般書……12

『山片蟠桃』……12

『日本の私塾』……13

『中井竹山・中井履軒』（叢書・日本の思想家 24）……14

『なにわ町人学者』……16

『大坂学問史の周辺』……17

『町人社会の学芸と懐徳堂』……17

『近世大坂と知識人社会』……18

『懐徳堂とその人びと』……19

『富永仲基と懐徳堂―思想史の前哨』……20

『鎖国してはならない』……21

『自由学問都市大坂―懐徳堂と日本的理性の誕生』……22

『ニコライ堂の女性たち』……23

『懐徳堂知識人の学問と生―生きることと知ること―』…24

『京　大坂の文人 続々』……26

『墨の道　印の宇宙　懐徳堂の美と学問』……27

『江戸時代の親孝行』……28

『大阪大学の歴史』……29

『市民大学の誕生－大坂学問所懐徳堂の再興』……30

3．文学作品……33

『富永仲基異聞―消えた版木』……33

4．図録…… 34
『懐徳堂―近世大阪の学校―』…… 34
『《図録》懐徳堂―浪華の学問所』…… 35
『懐徳堂アーカイブ　懐徳堂の歴史を読む』…… 36
『龍野と懐徳堂』…… 38
『「見る科学」の歴史―懐徳堂・中井履軒の目―』…… 38
『懐徳堂の印章』…… 40

5．事典…… 42
『大阪墓碑人物事典』…… 42
『懐徳堂事典』…… 42

6．その他…… 45
『懐徳堂文庫圖書目録』…… 45
『懐徳堂の過去と現在』…… 46
『懐徳堂考』…… 47
『懐徳堂記念会の九十年』…… 48

執筆者紹介…… 50

凡　例

・各項目は書名、書誌情報（編著訳者名、出版社名、刊行年、頁数、定価）、解説文、紹介者名からなる。なお、定価については現在入手可能なものについてのみ付している。

・刊行年・定価については、概ね初版のものに基づいている。

・紹介文のスタイルは、文献の性格などによって大きく異なるため、あえて統一せず、紹介者の判断で自由に執筆した。

・表記方法が複数あるものについては、基本的に原著の表記に従った（例：木菟麻呂と木菟麻呂など）

1．研究・論文・報告書

『懐徳堂—１８世紀日本の「徳」の諸相—』

（テツオ・ナジタ著、子安宣邦訳、岩波書店、1992 年、538 頁、4000 円）

（原題 : Visions of virtue in Tokugawa Japan : The Kaitokudo, Merchant Academy of Osaka）

懐徳堂の生み出した「徳」に関する認識論的言説について、18 世紀思想史の流れの中にその位置づけを試みた書。全体の構成は以下の 7 章より成る。

１「プロローグ」

人間の認識の基盤が、記録化された経験である「歴史」に存するのか、あるいはそれを超越した宇宙体系である「自然」に存するのか、という当時の議論において、懐徳堂は明確に後者の立場にあった。このような抽象的議論は、一見、現実問題からかけ離れているかのように見える。しかし、この「自然」に基づく「徳」の遍在論は、やがて社会階級の限界を超えた庶民道徳を確立すると共に、民間における合理思想の発達をも促したのである。

２「哲学的環境」

懐徳堂思想の成立前史として、二つの哲学的潮流が挙げられる。その一つは、伊藤仁斎の「歴史」に基づく理論である。仁斎は、朱子学の形而上説に基づく位階的秩序を否定すると共に、歴史的古典である『孟子』の性善説に依拠することにより、万人に遍在する善性とその実践を説いた。もう一つの流れは、貝原益軒と西川如見の「自然」に基づく理論である。二人は、朱子学から自然における絶対的で普遍的な「天理」を引き出したが、それらを階級性としてではなく、万人に同一に備わる普遍性として理解し、この「天理」と一体化することにより、知的かつ道徳的な判断が万人に成し得るとした。

３「徳の探求 - 懐徳堂の創設」

享保 11 年（1726）、社会的に低位かつ不安定であった商人が、何者の干渉をも受けず平等に道徳教育に没頭できる場として、官許の懐徳堂が成立した。伊藤仁斎にも学んだ初代学主の三宅石庵は、師と同じく万人に固有の善性を説く一方、商人の求める利は「義」の延長であるとし、以後も懐徳堂で説かれる商業倫理の基礎を立てた。石庵の実践的折衷主義は、前章で説かれた二つの哲学的潮流を兼ね備えることにより、位階的秩序を重んじた従来の朱子学を、庶民道徳へと変容させた。その一方で、学問認識上の境界線をどこで引くべきかという問題を、次世代の懐徳堂にもたらすことになった。

４「逸脱と秩序の間 - 第一原理としての歴史あるいは自然」

石庵の下で学んだ富永仲基は、「歴史」に認識の基盤を置き、古典文献の批判的研究を徹底した。その結果、様々な古典が自らの権威の対象をより古い時代に設定しようと争ったことを見抜き、遂には道徳的源泉としての古典の価値を解体させるに至った。このことにより仲基は師の石庵から破門され、懐徳堂から追放された。一方、石庵の死後に助教として懐徳堂を支えた五井蘭洲は、懐徳堂の学問を朱子学と定めることにより、その哲学的

認識の基盤を「自然」に置くことを確定した。「格物」による合理的認識を推奨すると共に、道徳規範は聖人の定めた古典の中にしか存在せず、その認識能力は万人に備わっている訳ではないと説く「歴史」派の荻生徂徠を非難することにより、以降の懐徳堂の学問的立場を明確にした。

第5章「学問所からの知的展望」

蘭洲の薫陶を受けた中井竹山と履軒の兄弟は、対照的な性格でありながら、その活動により懐徳堂の全盛をもたらした。学主を務めた兄の竹山は、積極的な社会・教育制度改革の提言、広い交友関係などにより、懐徳堂の声望を高めることに成功したが、思想的には従来の「徳」の遍在論や、合理的認識の尊重、徂徠批判などを師より忠実に受け継いでいた。一方、兄と異なり内面的だった履軒は、自らの私塾に籠りながら精緻な文献学的研究を続け、遂には朱子学の古典解釈を逐一反証するに至ったが、『中庸』を重視することにより、「天命」に基づく認識能力の遍在という概念は保持し続けた。また、天文学や医学を初めとする自然科学にも興味を持ち続けた。履軒において「歴史」と「自然」は破綻することなく結び付いていたのである。

第6章「夢の代わりに」

「歴史」と「自然」の両者に渡る懐徳堂の思想的営為の成果は、商人が自身の思想を生産する上で再利用された。草間直方の著『三貨図彙』は、貨幣史を科学的に解析しているが、決して無思想ではなく、「義」の理論に根拠づけられており、武士主導の経済の現状に対して批判を表現するため、「歴史」の様式に依拠したのである。一方、山片蟠桃の著『夢の代』においては、天文学を諸原理の中心として定めることにより、地球上の歴史や思想を相対化しようと試み、遂には合理的認識の徹底と、迷信の完全な否定へと至った。それは「自然」に基づく懐徳堂の認識概念の包括的な総合であり、庶民の持つ正確な知識と認識への信頼を最終的に確認し、来るべき科学重視の知的変革をも予知するものであった。

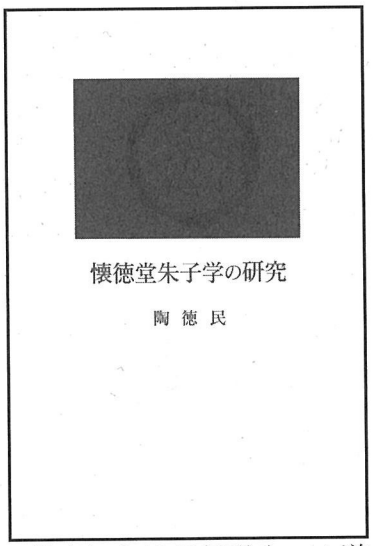
《本書の意義》

本書における懐徳堂思想への言及は非常に多岐に渡るが、「自然」に遍在する規範を知る能力は万人に与えられている、とする根本認識の変容を、時系列的に一貫して追及している点は変わらない。本書は「歴史」と「自然」を二つの思想史上の概念軸として設定している点において極めてユニークであるが、それらの概念を巧みに操ることにより、以下の点を実証することに成功している。つまり、「自然」が認識基盤の本体とされたことにより、認識の遍在性（考える力は誰にでも与えられている）、および認識対象の相対性（全てのものは思考の対象となり得る）が導き出され、結果として庶民自身による知的営為が促進された。それにより、「歴史」もまた相対化され、自身の言説を「歴史」から抽出し作成できる可能性が庶民に示され、かつそれは実行されたのである。

本書は、創建前史から『夢の代』へと至る懐徳堂思想史の全貌を俯瞰的に捉え、その日本思想史上における位置づけを達成した研究として、今もなお大きな価値を持っている。ただし、原文における固有名詞の誤りや曖昧な表記が、邦訳においても各所でそのまま放置されているのは残念である。（三谷）

『懐徳堂朱子学の研究』

（陶徳民著、大阪大学出版会、1994 年、422 頁、6500 円）



五井蘭洲を中心として、懐徳堂朱子学派の学問・思想の伝統と特質とを考察した研究書。著者の学位論文をまとめたもの。序論にて懐徳堂朱子学の基本性格と位置づけについて概説し、一章から六章を本論とし、むすびにて本論を総括している。末尾には付録として、懐徳堂をめぐる研究史が、学芸史的研究と思想史的研究と二つに分けて紹介されている。

第一章　朱子哲学の研鑽

本章では、蘭洲を中心に同学派の「天人合一」論と「格物窮理」論とを考察し、朱子学的世界観と認識論とを解明している。著者はまず、蘭洲の「天人合一」論について、その基底にある理気説や、人道との関係、またその実践的意味を考究している。次に、「格物窮理」論について、窮理は、蘭洲にとって究極的には心の修養のためのものであったが、それに対し、中井竹山を経て中井履軒・山片蟠桃に至ると、自然科学の独自の意味が認識され始めたことについて述べている。

第二章　天文・地理の探究

本章では、天文・暦算と地理学とに関する同学派の知見とその実学の精神とを論究している。著者はまず、天文学・暦学について、懐徳堂の学系には漢学・洋学・和学の三者があることを述べ、それから宇宙構造などに対する所見及びそこに見られる相対主義的思考などを論じている。次に、地理学について、懐徳堂の世界観や、実地調査の精神について論じている。

第三章　経世策の考案

本章では、竹山『社倉私議』と、竹山が関与した『聖論広訓』の和刻とに対する検討を通じて、同学派の社会事業思想と教化思想の特質とを分析している。著者はまず、『社倉私議』によって、近世後期の現実社会を反映させながら、その目的に一揆の予防があることや、大坂の商人を利用することなど、竹山の社倉思想の特質について論じている。次に、竹山の学校普及論などに言及し、その教化政策と当代観について述べている。

第四章　徂徠学批判

本章では、『論語』と古代制度（度量・律調）とをめぐる同学派の荻生徂徠批判を検討し、その聖人観と古代学の特色とを明確にしている。著者はまず、徂徠の聖人観や形式主義的礼楽観と、中華崇拝に対する懐徳堂からの批判について論述している。次に、徂徠の窮理反対論や、天に対する不可知論に対し、蘭洲・履軒の主知主義・合理主義からの批判について考究している。

第五章　古代史観と神道批判

本章では、中井履軒とその弟子である山片蟠桃との、古史観と神道論とを概括した後、五井蘭洲の『日本書紀』研究と神道批判論との意義を論じている。著者はまず、履軒・蟠桃の古史観と神道論を概括・比較している。その上で、蘭洲の学説に対する従来の研究不

足を指摘し、次に、蘭洲の日本書紀研究や、その神道批判論について論述している。

第六章　無鬼論

本章では、同学派の無鬼論を系統的に追求することによって、その鬼怪否定の論理の形成と、朱子学の鬼神観に対する批判的継承の精神とを論述している。著者はまず、蘭洲の所説が懐徳堂の無鬼論形成において先駆的地位にあることを検討している。次に、懐徳堂の無鬼論を完成させた竹山・履軒・蟠桃の説を考究し、それが朱子学の鬼神観を批判的に継承していることを明らかにしている。また、並河寒泉の迷信打破の思想・無鬼論についても言及している。

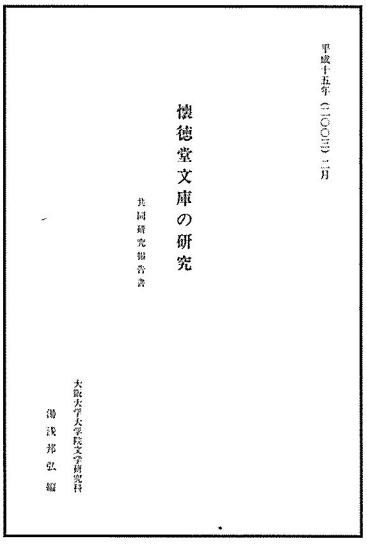
むすび　懐徳堂朱子学の諸特性

本章では、一章から六章までの論議を要約し、それを踏まえて懐徳堂の学問・思想の諸特性を概括し、また、近世儒学思想における懐徳堂朱子学の意義を論じている。著者は、懐徳堂朱子学の特性について、以下の五点を挙げている。「朱子学の原理・原則を堅持すると同時に、その個別学説には必ずしもこだわらないという自由な精神も有すること」「学術と政治の諸問題に関する持論が穏健着実で、中正な精神を有すること」「自然科学を含むさまざまな学問領域に対して知的関心をもち、博学の精神を有すること」「経世済民の抱負を有し、実践的精神に富むこと」「異端・異学に対して非寛容的態度をとり、批判的精神を有すること」である。

《本書の意義》

本書は、懐徳堂を朱子学という大きな枠から取り上げており、その中でも従来あまり研究が進められてこなかった五井蘭洲の学問について深く考究している。懐徳堂の学問的方向性を定めたとされる蘭洲の研究は、懐徳堂の思想を考える上で、非常に重要であると思われる。また、その研究対象としている学問分野も、朱子学や和学、地理・天文学など、幅広い分野に渡っている。中村惕斎の朱子学など、他の学派との比較もなされており、懐徳堂がいかに他学派と接しているかを窺うことができる。　（竹村）

『懐徳堂文庫の研究　共同研究報告書』



（湯浅邦弘編、大阪大学大学院文学研究科、2003 年、195 頁）

懐徳堂文庫における貴重資料の解題および懐徳堂に関する論考をまとめた共同研究報告書。二部より成る。

懐徳堂文庫資料の総合調査及び電子化は平成 12 年（2000）から始められた。平成 13 年（2001）５月には大阪大学創立 70 周年記念事業の一環としてマルチメディア技術による懐徳堂の顕彰、８月には懐徳堂文庫の全資料が大阪大学附属図書館旧館書庫より新館貴重図書館に総合移転が行われた。

このような経緯を経て、本書の発表された平成 15 年（2003）２月当時の解題については『懐徳堂辞典』（大阪大学出版会、2001 年）ならびに「懐徳堂データベース全コンテンツ」（『大阪大学大学院文

学研究科紀要』第42巻、2002年）として発表されている。

本書発表後も解題執筆は続いており、本書は上記『懐徳堂辞典』「懐徳堂データベース全コンテンツ」の続編であるとともに懐徳堂文庫研究の中間報告書という位置づけとなる。

（第一部）

「懐徳堂文庫資料解題」、「懐徳堂文庫等所蔵新収資料・器物等目録」、「楚辞関係論文目録－日本篇－」より成る。

一「懐徳堂文庫資料解題」　湯浅邦弘氏他９名

本書の大部分を占めており、本書の意義とも言える懐徳堂文庫資料の解題。これらについてさらに10部にわけ、各１名が解題を執筆している。資料名、関係者名、数量、外形寸法、懐徳堂文庫図書目録に記載されている頁を基本情報として載せ、その後800字程度の解題を載せている。さらに漢籍、国書については書誌情報の詳細版として寸法、版式、版心、内題、外題、刊記、奥書、印記、装訂、備考、蔵書票、付箋番号が載せられており、資料についての詳しい情報を知ることができる。

二「懐徳堂文庫等所蔵新収資料・器物等目録」　井上了氏

昭和51年(1976)に発行された懐徳堂文庫図書目録は、文書および器物については記載せず、昭和51年以降に受け入れた図書の整理もされていなかった。本篇によって昭和51年から平成15年までの器物、資料についても目録が完成することとなった。

三「『楚辞』関係論文目録－日本篇－」　前川正名氏

楚辞について1920年以降に発表された日本語の研究文献を集めた目録。「西村天囚と藤野岩友－日本楚辞学の一系譜－」に関わって研究文献を載せた物。

（第二部）

一「『紫烟帖』『蘭州先生真蹟帖』翻刻」　藤井岳人氏

三宅石庵の『紫烟帖』および五井蘭州の『蘭州先生真蹟帖』に翻刻（活字化）を施したもの。俗字、略字などの異体字を適宜改めている。三宅石庵の書法は唐代屈指の書家顔真卿に通じるものとされ非常な人気をもっていた。この『紫烟帖』は懐徳堂文庫に所収されている数少ない三宅石庵自筆の書として貴重なものであった。また『蘭州先生真蹟帖』は五井蘭州の書跡をうかがうことのできる貴重な資料である。

二「中井履軒の「孝」観」　佐野大介氏

中井履軒の「孝」観および『孝経』観についての論考。

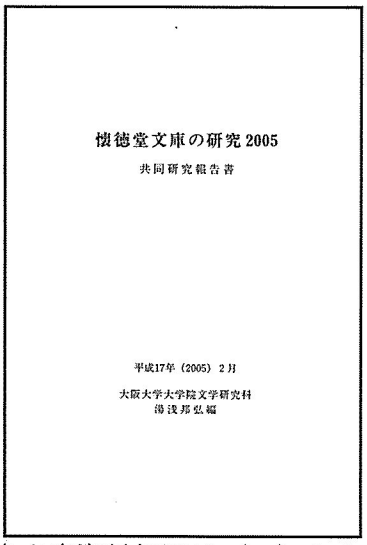
三「西村天囚と藤野岩友－日本楚辞学の一系譜－」　前川正名氏

西村天囚・藤野岩友の両者関係からの日本楚辞学の系譜の一端についての論考。重建懐徳堂の講師兼理事であった西村天囚(1865 ～ 1924)、國學院大学名誉教授である藤野岩友(1898 ～ 1984)も楚辞研究において高い評価を受けていた。その藤野は『巫系文学論』序言の中で西村に教えを受けたことを記していた。著者は両者の関係から日本素地学の系譜を考察している。

《本書の意義》

本書の編纂によって懐徳堂文庫の調査が進み、特に昭和51年時には所収はしていても管理されていなかった多数の資料について、ここでデータとして残されたというのは非常に重要であろう。　（久保）

『懐徳堂文庫の研究2005　共同研究報告書』



（湯浅邦弘編、大阪大学大学院文学研究科、2005 年、138 頁うちカラー口絵４頁）

平成 15 年（2003）２月に刊行した『懐徳堂文庫の研究』のさらなる続編である共同研究報告書。『懐徳堂文庫の研究』と同じく湯浅邦弘氏によって編纂された。湯浅邦弘氏他 15 名による資料解題が主であり、資料名索引、『懐徳堂文庫の研究』正誤表が附される。また口絵が載せられており、池田炭七律詩、騎馬武者図、『喪祭私説』などの画像を見ることもできるようになっている。

一「懐徳堂文庫資料解題」

学内外の研究者 16 名による書籍、文書、器物を包括している懐徳堂文庫資料の解題。『懐徳堂文庫の研究』では懐徳堂文庫資料解題は（一）から（十）となっていたが、本書ではそれを引き継いだ形として（十一）から（二十六）となっている。また書式は『懐徳堂文庫の研究』と同様である。

二「資料名索引」

『懐徳堂データベース全コンテンツ』（『大阪大学大学院文学研究科紀要』42-2 モノグラフ編）・『懐徳堂文庫の研究』（共同研究報告書）および本書に掲載された貴重資料の解題を五十音順に配列し、貴重資料が前述三書のどこに載せられているのかを「紀要」「研究」「本書」の略号にて示し、ページ数を表出している。

三「共同研究報告書『懐徳堂文庫の研究』（平成15年2月）正誤表」

前編にあたる『懐徳堂文庫の研究』についての正誤表を載せたもの。

《本書の意義》

本書は一でも述べたように『懐徳堂文庫の研究』の続編である。さらに資料名索引が有り『懐徳堂データベース全コンテンツ』・『懐徳堂文庫の研究』及び本書の約三百点余りの解題を横断的に検索できるということから、単に『懐徳堂資料の研究』の続編というだけではなく、平成十三年以来の調査研究・解題執筆の総決算という意味合いが込められている。懐徳堂文庫の研究はここに一段落を見たのである。　　（久保）

『懐徳堂研究』

（湯浅邦弘編、汲古書院、2007 年、431 頁＋ 11 頁（懐徳堂年表・著者紹介）、13000 円）

平成 12 年（2000）に結成された「懐徳堂研究会」のメンバーによる論文集。文学から思想・歴史に至るまで幅広い内容に関する 20 の論考が収載されている。内容は、テーマごとに６部に分けられ、各部には２～７の論考が収められる。序ではこれまでの懐徳堂の研究史を概説し、巻末には「初出誌一覧」「懐徳堂年表」「著者紹介」を付す。

第一部　懐徳堂通史

第一部では、懐徳堂の歴史全体に関わる二つの論考が掲載される。「第一章 懐徳堂の

祭祀空間」（湯浅邦弘）では、朱子の『家礼』と二代目学主中井甕庵の『喪祭私説』とを比較することにより、儒教を基盤とした懐徳堂においてどのような祭祀が行われていたかを明らかにしている。

また「第二章 懐徳堂学派の『論語』注釈」（湯浅邦弘）では、「夢」に注目し、他学派の説と懐徳堂学派の説とを比較することで、懐徳堂学派の思想的立場を明確にしている。

第二部　初期懐徳堂

第二部には、初期懐徳堂について検討を加えた二つの論考が掲載される。まず「第一章 初代学主三宅石庵と『萬年先生遺稿』」（寺門日出男）においては、『懐徳堂文庫図書目録』に未収載の石庵の詩文集を取り上げて考察する。西村天囚の『懐徳堂考』で「詩文に長ぜず」と評され、従来そのように認識されていた石庵であるが、実際には多くの詩作があったであろうことが推察され、また三言詩・六言詩といった珍しい詩型の作品も残されていることから、彼が積極的に漢詩表現を追究していたであろうことが指摘される。

続く「第二章 五井蘭洲遺稿の伝存」（寺門日出男）では、蘭洲の漢詩集『鶏肋篇』を中心に取り上げ、それに対する弟子中井竹山・履軒兄弟の見解も含めて論じられている。

第三部　中井竹山

第三部では、第四代学主として懐徳堂の全盛期を築いた竹山に関する四つの論考があげられている。まず「第一章 奈良 大阪 墨の道」（湯浅邦弘）では、奈良の墨の老舗である古梅園と懐徳堂との関係について記述される。ここでは、古梅園が所蔵する懐徳堂の墨型を検討することで、古くから懐徳堂と古梅園との間に深い関わりがあったことを明確にしている。

次に「第二章 懐徳堂における唐様書道の特色」（福田哲之）では、竹山が当時主流であった明代の書法によらず、唐・宋の書法を基準としていたことを述べ、そこから懐徳堂における書の特質を明らかにしている。

続く「第三章 中井竹山『詩律兆』における謖園学派批判」（矢羽野（古賀）芳枝）では、竹山の『詩律兆』を取り上げて当時における平仄や音韻の問題を紹介しつつ、その著述意図が謖園学派に対する批判にあったことを指摘する。

また「第四章 中井竹山の詩作と感性」（上野洋子）では、明末清初の文人李漁の「十無詩」とそれに触発されて作られた竹山の「十無詩」とを比較することにより、李漁と竹山の信念に相違があったこと、それでも竹山が柔軟な詩作態度で李漁の表現を高く評価していたことが述べられる。

第四部　中井履軒

第四部には、兄竹山と共に懐徳堂黄金期を築いた履軒について、七つの論考が掲載される。履軒は懐徳堂で最も多くの学術業績を残した学者であり、論考で取り上げられる内容も多方面に渡っている。「第一章 『論語逢原』に見える聖人観」（藤居岳人）や「第二章 中井履軒の性善説」（藤居岳人）では、基本的には履軒が伝統的儒教の聖人観や性論を有しており、その立場が必ずしも朱子学の立場と相違していたわけではないことが示される。

また「第三章 中井履軒の「孝」観」（佐野大介）や「第四章 中井履軒の『春秋』観」（井上了）、「第五章 『孟子逢原』における「覇」」（池田光子）や「第六章 中井履軒の『論語』注釈」（久米裕子）においては、履軒の儒教経典や註釈に対する批判的精神や先

賢にとらわれない積極的かつ実証的態度が、多くの用例をもとに述べられている。

続く「第七章 中井履軒の宇宙観」（湯城吉信）では、履軒の作成した「木製天図」「紙製天図」「方図」という三つの天文関係図が取り上げられ、地動説を唱えた弟子山片蟠桃へ繋がる履軒の大宇宙論が解説される。

第五部　幕末の懐徳堂

第五部には、江戸時代末期、懐徳堂最後の教授として奮闘した並河寒泉に関する二つの論考が掲載される。「第一章 ロシア軍艦ディアナ号と懐徳堂」（湯浅邦弘）では、寒泉の『拝恩志喜』に注目して、ロシア軍艦が大阪湾に侵入した際、実際に寒泉が漢文による筆談通訳を行ったか否かが検討されている。

また続く「第二章 並河寒泉撰『難波なかづかみ』の攘夷的心情」（矢羽野隆男）では、寒泉の能楽作品である『難波なかづかみ』を取り上げて考察することで、幕末における懐徳堂の様相と、その中にあって強い攘夷観念を抱いていた寒泉の思想傾向について言及している。

第六部　明治・大正の懐徳堂

懐徳堂は財政の逼迫により明治二年（1869）に閉校となるが、その後大正五年（1916）に再建された。第六部には、その重建懐徳堂期に関する三つの論考が掲載されている。「第一章 『懐徳堂紀年』とその成立過程」（竹田健二）においては、竹山・履軒の曾孫にあたる中井木菟麻呂の『懐徳堂紀年』の成立事情や、西村天囚による同書の刪定の問題をめぐって考察が進められている。

また「第二章 第二次北山文庫「懐徳堂年譜」について」（竹田健二）では、『懐徳堂紀年』の十年後に執筆された「懐徳堂年譜」に関して検討が試みられている。ここでは「懐徳堂年譜」の成立を通して、中井家の子孫として強い自負を抱いていた木菟麻呂と「懐徳堂は中井氏の私学に非ず」という立場にあった西村天囚および懐徳堂記念会との間に大きな意識のズレが存在したことを指摘する。

最後に「第三章 西村天囚と泊園書院と」（矢羽野隆男）では、藤沢南岳の著した『論語彙纂』に対する天囚の書き入れや、南岳の属する泊園書院（徂徠学派）と天囚との交流から、天囚が泊園書院をどのように認識していたかについて追究している。

《本書の意義》

本書は、多くの執筆者によって様々な面から検討された論考が収められており、非常に読み応えのある研究書と言える。気になる人物や時代について、一つの章のみを取り上げて読んでも有用であるし、また初めから通読しても、時代の流れに沿った構成となっているため、懐徳堂の歴史を概観しながら多くの有益な情報を得ることができる。

論述は経学・文字学・天文学・歴史学など多方面にわたっており、本書を通して懐徳堂における学問がいかに多彩なものであったかを窺うことができる。また、懐徳堂に関する最新の研究や内部の事情に一歩踏み込んだ検討が行われている点も本書の特色と言えるだろう。

なお『懐徳堂研究』に関しては、大形徹氏が書評を記しており（「書評『懐徳堂研究』」、懐徳堂記念会『懐徳』77 号掲載）、その中では「たんに朱子学という言葉だけでは括れない懐徳堂に対する全体像が明らかにされている」と称されている。　（金城）

2．一般書

『山片蟠桃』

（亀田次郎著、全国書房、1943年、217頁＋口絵4頁）

山片蟠桃について、その事跡や学説・思想など様々な面から解説した書。国語学者の亀田次郎氏によって執筆される。内容は、伝記・著作・学説・歴史論・経済論・政治論・経学論・宗教論・国字論の九章よりなる。以下にその内容を紹介する。

山片蟠桃の生涯

本書ではまず、蟠桃に関する資料（伝記や多くの書簡など）が引用され、その事跡について解説される。ここでは蟠桃の出生地、交友関係、奉公を通じて懐徳堂に学んだ経験のあることなど広く言及しており、蟠桃の生涯を概観することができる。

著作と学説について

次に本書では、著者である亀田氏の調査により存在が確認された蟠桃の著作（『草稿抄』や『夢の代』など）九部について解題が記される。亀田氏は、九部の中で所在が明確な書物に関しては、書体や目次・蔵書者の変遷などを詳細に記述する。しかしこれに対して、所在が確認できない書物や亀田氏が未見の文献（『祈晴類聚』や『大知辨』など）については、先行研究や他書の序を引用することによってその内容を紹介している。

さらに本書では、蟠桃の学説で注目できるものとして「天文地理論」が取り上げられる。ここで亀田氏は、天動説が主流であった当時において、蟠桃が地動説を主張したこと、蟠桃が西洋諸国の東洋侵略に対する警戒を論じたことを高く評価している。

蟠桃の思想的位置付け

また本書では、蟠桃の学問の根底には儒教思想と合理主義の二つの流れが存在していたことが指摘される。亀田氏は、とくに歴史・経済・政治・経学・国字の諸論には儒教の影響が強く見え、これは蟠桃が懐徳堂で中井竹山や中井履軒に師事して儒学を学んだことに起因すると指摘する。

また一方で、天文地理・宗教・医学の各論に関しては、蟠桃が洋学から習得した自然科学の合理主義が基本となり成立したと述べている。

《本書の特色》

本書は、懐徳堂を主題とした文献において詳述されることの少ない「山片蟠桃」を中心に扱った書であり、これまであまり顧みられることのなかった蟠桃の出自や著作・学術論について知る上で、重要な文献であると言える。また、蟠桃の学問を「国字論」という観点からも論じており、そこには著者である亀田氏の国語学者としての視点を窺うことができ、興味深い。

本書は、懐徳堂に関してほとんど記されておらず、本文中から懐徳堂の諸事情を窺うことは難しいが、かつて懐徳堂に学んだ経験を持つ蟠桃については様々な面から詳述されており、彼がどのような生涯をおくり、どのような考えを抱いていたかを理解するのには、

大変役立つ書であると言える。

（なお、亀田氏は国語学の分野、特に古辞書・韻書などに多くの業績を残しており、本書の他には、『国語学書目解題』（明治書院、1933年）、『国語学概論』（博文館、1909年）などの著書がある。）

（金城）

『日本の私塾』

（奈良本辰也編、淡交社、1969年、267頁）

松下村塾や咸宜園など、江戸時代における11の私塾について、各私塾の具体的な制度・仕組みに注目して紹介している書。そのうち懐徳堂については、249頁から267頁で、師岡佑行氏が執筆している。以下、その章について紹介する。

町人の学問所

本章では最初に、懐徳堂が官許を得た経緯について述べられている。また、五同志が官許を求めた理由についても触れており、師匠である三宅石庵の学統の保証や、商人が身分的には低い位置にいるという負い目によるものであったと推測されている。

次に石庵について説明され、学者の枠を破った学者と評されている。そして、学問ではなく商いを第一としていたことや、身分によらず皆を同輩としたことから、懐徳堂が町人の学問所であると説く。また、なぜ町人が学ぶのかについても言及されており、商業による利益は悪であるという当時の考えに、商人は不安を抱いており、その商人に対して、懐徳堂では利殖の正当性を説いたということが記されている。

懐徳堂の流れ

続いて、懐徳堂の流れが学主ごとに述べられている。中井甃庵の時代には、懐徳堂の基礎が固められたとされ、校舎の建て替えなどが行われる一方、助教として講義をした五井蘭洲が、儒学のみだった懐徳堂の講義を、文学や医術にまで広げ、学風を一変させたとする。しかし、その後に学主を継いだ三宅春楼の代には、学政は振るわなかったという。

その後、中井竹山と、その弟の履軒とによって、懐徳堂が最盛期を迎えたことをいう。竹山は塾生に対し「五勿」という取締り規則を作ったが、そこからは、彼の関心が大阪町人に向いていることが窺えるとし、また、竹山には稚気にあふれた一面もあり、交際好きであって、老中の松平定信に諮問を受けることもあったと述べる。竹山の代に懐徳堂が焼失したことにも触れており、懐徳堂は幕府からの援助とともに、大阪の富豪からの援助で再建されたが、そのような援助がある懐徳堂は、近世の塾の中でも恵まれていた存在であるとしている。そして、そこでさえ儒業だけで生活を成り立たせるのは難しいことであったとする。

竹山の没後については、弟の履軒が存命だった頃は、懐徳堂の盛名は維持されていたという。しかし、履軒までも没してしまった後は振るわず、後の学主は竹山・履軒の後を守るのに精一杯であったとし、諸国の英才は、やがて現れる蘭学中心の適塾に向かったと述べている。

懐徳堂の合理性

こうして懐徳堂の流れを説明した後、履軒が上田秋成に対して、幽霊や狐つきを批判し

た逸話が載せられる。そして、その合理主義的世界こそ、懐徳堂の世界であったと説く。

ここではまず、儒学者でありながら儒教を批判して石庵に破門された、富永仲基を紹介している。師匠である石庵が朱子学的な世界の合理性を信じていたことや、商売を行う町人の世界には、世界は合理的に認識しうるという考えがあったことをまず述べた上で、仲基の、人間を重視する思想が、それらの影響から出ているという。

そして、本章の最後に、山片蟠桃について主に三点述べている。一点目は、彼の考えには、大阪町人を背景とする合理的世界が支えた、懐徳堂の思想的伝統があったこと。二点目は、蟠桃の自信が、武士よりも町人の方が世の趨勢を見極めているという自負から出ていること。三点目は、蟠桃がヨーロッパに関心をよせていたことである。

《本書の特質》

本書は懐徳堂についての基礎的な知識を平易に述べており、理解しやすい内容となっている。また、懐徳堂を語る際に町人を重視し、町人がなぜ学問を求めたのか、という視点での記述が含まれるのは、懐徳堂成立の時代的背景を理解するのに有益であろう。

ただし、本書では私塾をその対象としているが、懐徳堂は官許を受けた学問所であり、他の私塾とは一線を画している。教育対象が武士に限定されていないなどの理由で、懐徳堂も私塾としてここでは扱っているのだろうが、それについて些か説明が不足している感があるのは残念である。

（なお、本書は角川文庫にも収められており、そちらは 1974 年に発刊されている。）　（竹村）

『中井竹山・中井履軒』（叢書・日本の思想家24）

（小堀一正・山中浩之・加地伸行・井上明大著、明徳出版社、1980 年、347 頁、2500 円）

中井竹山・履軒を中心に、当時の懐徳堂を取り巻く環境や懐徳堂の変遷について記した書。全７章で構成され、巻末には「竹山・履軒略年譜」、「附録」（著述目録・参考文献目録・関係人物表）を附す。１・２章を小堀一正氏、３～６章を山中浩之氏、７章を加地伸行氏、略年譜・附録を井上明大氏が執筆する。以下に各章の内容を紹介する。

１「懐徳堂と中井家と」

本章では、初代学主を務めた三宅石庵や官許を得るために奔走した中井甃庵の事跡を通して、主に懐徳堂萌芽期の出来事が詳述される。懐徳堂の創設には、五同志をはじめとする町人たちの支援が必要不可欠であった。そのため、一般に懐徳堂は「町人によって建てられた町人のための学校」と認識されているが、それは明治以降の復興運動の中で生まれた評価であり、実際には低く見られていた儒者の地位を向上させる目的があった。本章では、懐徳堂を町内に根付いた私的な（三宅家を中心とする）ものから、公的な（官許を得た）ものへと転換させようという甃庵の動きがあったことが示される。

２「中井竹山の生涯」

本章では、懐徳堂の全盛期を築いた竹山の幼少時代から、学校経営に奮闘した学主時代を経て、隠居に至るまでの生涯が述べられている。当時の懐徳堂は、官許の学問所（幕府が認可した学問所）でありながら、奉行所や町内からは単なる私塾のようにも認識されていた。父甃庵の政治的・経営的才能を受け継いだ竹山は、懐徳堂が単なる私塾ではなく、

幕府の文教政策の一翼を担うための公的な学問所だとして、このような懐徳堂に対する不安定な位置付けを解消するため尽力した。また本章では、竹山が懐徳堂の社会的意義を幕府為政者や一般に広く知らせるため、孝子の顕彰運動を積極的に展開し、甃庵以来切望していた懐徳堂の官学（幕府直属の学校）化を図ったことについても記されている。

３「竹山をめぐる人々」

本章では、混沌社（片山北海を中心として大阪に設立された詩社）のメンバー、とくに頼春水や尾藤二洲らと竹山との交流が記される。竹山の学問については、『非徵』を著し徂徠学を激しく非難したこと、中江藤樹や熊沢蕃山を思想面からではなく「実徳」の人という理由で高く評価したことなどの特徴が指摘される。

４「懐徳堂の教育」

本章においては、大阪の商家に育った上田秋成の懐徳堂評価、懐徳堂の運営システムやそこに学んだ人々に関する記事、竹山の教育理念などが記される。竹山の門下には『夢の代』を著した山片蟠桃がいたことや、龍野・九州の学者も多く竹山の許を訪れていたことが記述され、竹山を中心とした懐徳堂が、当時いかに大きな影響力を持っていたかを窺うことができる。

５「中井履軒の生涯」

本章では、履軒の幼少時代から、履軒が懐徳堂を離れ独自の私塾水哉館を開き独立し、その後晩年に懐徳堂学主を引き受けるまでの事跡が述べられている。履軒は、兄竹山とは異なり、懐徳堂の運営に責任を負う必要がなく、官学である朱子学にこだわる必然性も持たなかった。この事情が履軒独自の思想を醸成していったとされるが、その一方で履軒は、懐徳堂における自らの立場について煩悶することもあったという。また履軒の交友関係は狭く、門人をとることにも熱心ではなかったが、わずかに尾藤二洲や頼春水・麻田剛立・三浦梅園らとの交流が密なものであったことが述べられる。

６「中井履軒の思想」

本章では、履軒の儒学思想・経世思想・歴史思想・歌論とその特質について述べられている。履軒に関しては、経学研究とりわけ『七経逢原』が著名であるが、経世論を述べた『華胥国物語』や保元の乱から南北朝合体に至るまでの歴史を叙述した『通語』、「歌のすがた」・「かすめ歌」などの歌論も残している。いずれも、朱子や賀茂真淵など先人の注釈に盲従することなく、批判的に独自の論を展開させていることが指摘される。

７「中国学との関わり」

本章は、竹山・履軒の学業を４分野（漢詩文・音韻・経学・史学）に分けて詳述する。一般的に竹山は詩文に優れ、履軒は経学の解釈に秀でていると言われるが、そこには竹山が懐徳堂経営者という立場から人と関わる機会が多く、その交流の場で作詩に迫られたのに対して、履軒はそのような実務に縛られることなく、後に懐徳堂を離れ私塾水哉館にて独自の研究に没頭できたという環境の違いや著述態度の相違があったと指摘される。また、漢詩文では『奠陰集』・『履軒古風』、音韻では『詩律兆』・『諧韻瑚璉』・『履軒古韻』、経学では荻生徂徠の『論語徵』に対する批判・『中庸錯簡説』、史学では『史記雕題』が主に取り上げられて解説されている。

《本書の意義》

本書には、懐徳堂の全盛期を担った竹山・履軒を中心に、両者を取り巻く家庭環境や交

友関係などが詳しく記されている。専門的な語句については随時、解説を加えながら紹介しており、また、竹山・履軒の行動に関する考察や小話などが多く盛り込まれているため、一般書として初めて懐徳堂に触れる者にとっても非常に分かり易い内容となっている。竹山・履軒の学業の中で、詩・音韻について解説されている一般書は少ないため、この点についても本書は意義深いものと言えるだろう。４人の担当者による執筆であるため、内容の重複が多少見られる点や時代の流れが前後する箇所がある点がやや分かりづらい印象を与えるが、巻末の年譜によって大まかな流れを外観することができるので、そちらも併せて参照されたい。（金城）

『なにわ町人学者』

（谷沢永一編、潮出出版、1983 年、176 頁、1000 円）

近世から近代にかけて登場した大坂町人学者についてのわかりやすい解説と、参考文献の紹介とをまとめた書。総勢 10 名の町人学者の紹介とそれぞれの参考文献、佐古慶三についての聞き書き、巻末に大坂で発行された名著の紹介という構成になっている。ここでは、特に懐徳堂と関わりのあった４名の解説を中心に説明する。

富永仲基

この書が著されたのが昭和 58 年（1983）という時代背景もあり、解説の導入部分はほとんど仲基の思想を引き合いに出した社会主義の批判になってしまっている。しかし、後半の参考文献を引いての中基の思想の説明はわかりやすく、人物解説も詳細にまとめられている。

木村蒹葭堂

蒹葭堂の本領は百科全書的な学風の創始であったとしている。蒹葭堂は収集家であったが、彼の収集は単なる慰みではなく、「考索ノ用トス」る目的での収集であった。また、交遊関係が非常に広い人物であったことについても言及されている。

草間直方

直方は優れた財政家であり、藩の財政を立て直すに当たって優れた手腕を発揮した。町人学者としては『三貨図彙』を著したことなどが有名だが、この書もまた、実践的な目的で著されたものであったことが詳しく述べられている。

山片蟠桃

近世において、関西では、関東に比べて時流におもねらない個性の強い人物が多く見られるという。蟠桃もまたこうした人物の一人であり、著作『夢の代』に見られる批判精神に貫かれた世界観は独自のものであるという点が、彼の商人としての業績とともに述べられている。

《本書の特色》

この書は特に専業の学者、文人ではなく、あくまで町人としての本業をもちつつ、学問でも名を成した人物をまとめたものであるため、直接懐徳堂の運営に関わったような人々については言及されていない。上で挙げた蒹葭堂、直方についても、この書の中では懐徳堂との関わりについては述べられていない。懐徳堂の活動を知ることができる資料という

よりは、当時の大坂の知的活動とその繋がりをうかがうことのできる一冊である。(畑中)

『大坂学問史の周辺』

(梅渓昇著、思文閣出版、1991年、220頁うち口絵4頁、2300円)

大阪学問史の変革を学問所との関係から論じた書。

仏教文化講演会での講演録である「大阪の学問史について」からはじめられ、その後の章にて含翠堂、懐徳堂について学問の変遷という視点から述べられている。

大阪学問史の変遷～含翠堂～

食糧が安く、豊かな生活を可能にした大阪が非常に発展し、富裕な町人が多数出たことを著者は先ず指摘する。そこから町人主導の学問所として含翠堂が成立したこと、またそこでの学問傾向として朱子学よりも陽明学に傾いていたことを述べる。

大阪学問史の変遷～懐徳堂～

享保9年(1724) 3月に大阪では大火があり、大阪船場で講義をしていた三宅石庵や五井蘭洲は含翠堂で講義を行った。この結果大阪の門人は含翠堂の空気に触発され、大阪にも学問所をと言う機運が高まった。これによって懐徳堂が成立し、享保11年(1426)に官許を得て半官立として大阪学問所となった。この懐徳堂には先述の含翠堂の設立運営に関わった道明寺屋吉左衛門が五同志として参加していることからも深い繋がりが窺えるとのべる。また著者は純粋な漢学ではなく、五井蘭洲の和学や古典学もおこなっており、国文学的な雰囲気がただよっていたと述べている。

大阪学問史の変遷～適塾～

懐徳堂文庫の中には中井履軒による『越俎弄筆』つまりは自分の職分を超えて筆を弄ぶという本がある。これは自然科学、医術の分野にまで踏み込んだものであり、このように大阪には洋学を受け入れる下地が有ったと著者は述べる。そのなかで緒方洪庵による適塾が成立し、全国から門人を集めていたことについて述べ、最後に大阪の学問では和漢洋の学問が敷居をお互い高くすることなく、幅広い学風をもち、庶民性があったことを指摘している。

本書の意義

「鵺学問」ともよばれ批判されることもあった広く学問を行うという懐徳堂の特徴、これが大阪学問史の中では特に批判されるようなものであったのではないとする。なぜなら当時の大阪の学問の中では特異なものではなく、大阪の学問史の中で自然に成立し得たものであるとする。そして懐徳堂でも行われた洋学の下地はその後適塾にも活かされていたことが述べられており、大阪の学問史全体から見た懐徳堂について理解できる書である。

また冒頭の学問の変遷については講演録から始められており、基礎知識がないと敬遠されがちな専門書でありながら、じつは内容を理解しやすくなっているという工夫がなされている。 (久保)

『町人社会の学芸と懐徳堂』

（宮本又次著、文献出版、1992年、290頁うち口絵16頁、3500円）

大坂文化について、江戸文化との比較や、懐徳堂という観点から述べている書。

第一章では「学芸史から見た上方と江戸」と題し、学問や文芸など幅広い文化を、東西で比較している。ここでも僅かに懐徳堂についてその概略を述べているが、より詳しくは第二章以下で述べられており、特に中井甃庵・五井蘭洲について多く頁を割いている。よってここでは、第二章以降を取り上げる。

懐徳堂の設立と中井甃庵の学風

第二章ではまず、中井甃庵の生い立ちについて述べており、その後、懐徳堂の創建及び初期懐徳堂の性格、またその成立背景など、懐徳堂に関することを主とした内容に移る。そして、学業や性行など、再び甃庵を中心とした記述に戻る。

五井持軒と五井蘭洲

第三章では、最初に父である五井持軒を、三宅石庵との関わりに注視しつつ述べている。その後、子である五井蘭洲の方について詳述しており、その内容は中井甃庵との交際や住友家との関係、漢学・和学に渡る学問範囲など多岐に及ぶ。また、江戸における蘭洲についても詳しく述べられている。

中井竹山・履軒

第四章・五章では、中井竹山・履軒がそれぞれ紹介されている。そこでは、学業と共に、その社会・経済思想について多くを述べている。竹山については、『蒙養篇』を中心として「利」に対する考えを説明し、履軒については、「田地均分論」などを取り上げている。

《本書の特色》

中井竹山「学問所建立記録」を原文全て引くなど、資料を豊富に用いており、とりわけ中井甃庵と五井蘭洲という初期懐徳堂の人間について、網羅的に知ることができる。また、各節毎に参考資料を列挙しており、興味ある分野を更に調べる際の道しるべにもなりうる。

ただし、場所によってはやや記述が散漫であり、唐突な印象を受ける嫌いもある。また、引用は基本的に原文であるため、不慣れな人間には読みづらい恐れもある。　　（竹村）

『近世大坂と知識人社会』

（小堀一正著、清文堂出版株式会社、1996年、257頁、3990円）

小堀氏の遺稿集。氏の、近世大坂という地域を中心としての近世知識人についての研究成果を集めて編成されている。全4章からなり、まえがきから始まり、最後に解説とあとがきを附す。本書は、初出は異なる論考が集められているものであるが、まず第1章で懐徳堂前に捨てられた子どもの話から始まり、第4章の市井の捨て子のゆくえでしめくくられるという一貫性を持っている。

まず第1章では、懐徳堂の捨て子問題から入り、そこから町内と懐徳堂の対立へと話は進められていく。なぜ町人の手によって生まれた町人の学校懐徳堂が、町内と対立しているのか。その疑問を提示したうえで、懐徳堂の成立、発展、中井竹山の懐徳堂経営、そして官許を得るまでの道のりが記される。捨て子という、あまり馴染みのない上に、懐徳堂

を語る上での接点も想像しづらい、おもしろい導入である。

続いて第２章では、中井竹山、山形蟠桃、司馬江漢についての考察により、懐徳堂の知の特質に迫っている。竹山については、あまり内容の知られていない『逸史』を、蟠桃については『夢の代』における「無鬼」論を、江漢については絵画についての主張「画論」を、各人１節ずつ割いてとりあげ、３名の思想像が探られている。江漢の節では、基となった発表が行われた際の質疑応答が最後に付されている。補足や著者の江漢論への展望なども語られ、本節の理解がより一層深まる内容となっている。

第３章では、幕末知識人社会のネットワークについて、日記書簡の解読により解明している。広瀬旭荘、松浦武四朗らの書簡をとりあげ、幕末の知識人たちの動向や、情報網について述べられる。各節の最後に文中で紹介された書簡の文面が付載されている。

第４章　町人文化の光と影に目を向けている。中井竹山の「裏通りの借家に住まざるをえない借家人の経済的な貧困こそが、捨て子を生みだす原因である」という意見をうけ、天下の台所大阪に住まう職人についてや、借家暮らしについて述べられる。捨て子禁止令について表や文書などを用いて述べられる。そして、捨て子がどのように生きていくのかが紹介される。第１章で捨て子の死に始まり、第４章で捨て子の生によって本書はしめくくられている。　（藤野）

『懐徳堂とその人びと』

（脇田修・岸田知子著、大阪大学出版会、1997年、154頁、1500円）

創建時から閉校、復興を経て現在に至るまでに懐徳堂が辿った歴史や、懐徳堂に関わった人物について記した書。一章・四章１・五章を脇田修氏、二章・三章・四章２を岸田知子氏が執筆する。巻末には、「あとがき」、「写真図一覧」、「引用文献」、「人物索引」が収載されている。以下に各章の内容を紹介する。

一「懐徳堂の創建」

本章では、懐徳堂創建に至るまでの経緯が記されている。当時の世相に関する記述を中心に、懐徳堂創建の由来や創建に際して生じた出来事、創建にあたって尽力した人びとについて説明されており、懐徳堂が成立するまでの過程が詳細に述べられている。また、創建当初の懐徳堂に関しても、学舎の図面を掲載した上で、その構造について紹介されている。

二「懐徳堂の人びと」

本章では、懐徳堂の学問を育てた人物として、三宅石庵、中井甃庵、五井蘭洲、中井竹山、中井履軒の五人が挙げられる。それぞれの著した作品や記した言葉を随所に示しつつ各人の生い立ちから生涯までが、懐徳堂での教育活動に従事した期間を中心に紹介されている。また、三宅家・中井家の家系図が掲載されており、懐徳堂を支えた両家の人物関係を知ることができる。

三「町人学者」

本章では、懐徳堂に学んだ者のうち代表的な人物として、富永仲基、山片蟠桃、草間直方の三人が挙げられている。各人の著書『出定後語』、『夢の代』、『三貨図彙』の内容に

触れながら、それぞれの生涯について述べられる。

四「懐徳堂の展開とその終焉」

本章では、初代学主三宅石庵没以降の懐徳堂の発展と衰退について述べられている。発展期に活躍した中井竹山と懐徳堂最後の教授となった並河寒泉の二人が行った教育活動および経営面での活動に関して特に明記される。また、資金面から懐徳堂を支えた大坂の町人や当時の幕府の動向といった懐徳堂を取り巻く周囲の状況についても記されている。

五「近代での復興」

本章では、懐徳堂閉校後、中井家関係者を中心に進められた懐徳堂復興活動について述べられている。現在に至るまで様々な文化活動に携わってきた財団法人懐徳堂記念会に関する記述を中心に、すでに解散した懐徳堂堂友会や懐徳堂記念会と合併した懐徳堂友の会の趣旨および活動内容が、各々の活動に尽力した人物の紹介を交えつつ記されている。

《本書の意義》

本書は、懐徳堂が歩んだ歴史について記すとともに、懐徳堂にまつわる人物に関しても詳しく述べられている。人物紹介の際には、各人の言葉を載せた上で、それぞれの思想について言及されているため、詳細な人物像がつかみやすい。また、随所に写真や図が掲載されており、具体的なイメージを持ちつつ内容に触れることができる。　　（森田）

『富永仲基と懐徳堂—思想史の前哨』

（宮川康子著、ぺりかん社、1998 年、242 頁、2600 円）

富永仲基の今言を重視する思想を懐徳堂周辺の知識人との関係の中で述べる書。

『日本学報』『思想』『批評空間』に掲載された、富永仲基と懐徳堂周辺の知識人にみられる思想の関係性について論じた四本の論文を合したものとなっている。各々の論文の関係は明確な構成のもと章立てされているわけではないが、全編を通して方法論的な問いから出発し、近代の歴史枠組みの中で隠されたもの、思考不能になっていたものを明るみに出すことを目標としている。

第１章 反徂徠としての富永仲基—「論語徴駁説」を中心に

仲基の論語徴駁説は元となる著作『論語徴駁』が無名の著者井狩雪渓によって書かれたためにほとんど注目されなかった。著者は、この章でその仲基の論語徴駁説にみられる「公」と「私」を主題にすえ、反徂徠の言説について考察している。

第２章 近世市井の歴史意識—『日本春秋』と『日本春秋書入鈔』

仲基と日初の手による『日本春秋』。この書によって仲基は徂徠の歴史主義の最も先鋭な継承者と見なされていた。しかし著者は仲基の修史の志は反徂徠の懐徳堂史学と共通の知的文脈にあるとする。また『日本春秋』に見られる民間の歴史意識の高まりは、水戸学ともまた、国学的歴史意識とも違う第三の道を開くものであったとする。

第３章 譬喩の言語学—富永仲基「三物五類」の説

言い伝えや説は人によって時代によって変化するとした上で、昔の本来の言葉を知ることが学問である、とした徂徠に対して、仲基は今の言葉こそが重要だとする「三物五類」の説を展開した。仲基はこの古言から今言という語用論的転換によって、古言重視としな

がら主観的解釈を多分に内包した徂徠の学の傲慢さを批判していると著者は言う。この徂徠の学への認識は懐徳堂周辺の知識人との一致しており、仲基一人のみの説ではないという指摘を行い。そして最後に、仲基が、古言から今言への転換を言語認識、学問の方法論上の問題として明確に分節して見せたと結ぶ。

第４章 あたりまえの誠の位相—「誠の道」と『中庸』の誠をめぐって

「翁の文」で仲基は今言を重視する立場から神仏儒について批判を加えつつ「誠の道」こそ「今の世の日本」で行われる道であると規定する。その内容はあくまで「あたりまえ」の日常道徳によってなっているものであった。この「誠の道」は『中庸』をめぐる履軒の「誠」と同じ知の枠組みを持っていることを著者は論じ、十八世紀懐徳堂周辺の知識人が共有していた知の特質をよく示していると述べる。

《本書の意義》

「早く生まれすぎた天才、近代にしか意味を見いだされることの無かった仲基」という枠組みが根強く、仲基に対しては数々の偏見が生み出されてきた。しかし仲基の思想家・歴史家としての実践もまた同時代の政治的、社会的制度と切り離なせず、十八世紀後半の歴史的言説との関連を見ることから考察してできるものである。したがって仲基の思想から十八世紀懐徳堂周辺に形成された知的世界の認識論的枠組みをうかがうことができるようになった。これによって独創性・特殊性の強調の裏面としてあまりにも平凡であると切り捨てられた「誠の道」が指し示す認識論的地平を明確にしたという意味で意義のある書である。 （久保）

『鎖国してはならない』

（大江健三郎著、講談社、2001 年、322 頁、1700 円）

1997 年から 2001 年にかけての、著者による講演の記録およびその文体で書かれた評論からなる書。巻頭には、「『鎖国してはならない』のための前口上」として、本書をまとめた目的や、各講演が行われた日時と場所などが記される。懐徳堂に関する講演としては、1999 年 11 月 11 日に関西学院大学「フォーラム・21 世紀への創造」にて行われた「懐徳堂から東海村まで」が 161 頁から 175 頁に収載されている。以下、その講演について紹介する。

テツオ・ナジタによる懐徳堂研究

本講演の冒頭では、シカゴ大学教授のテツオ・ナジタ氏の思想、とりわけ懐徳堂研究における同氏の考えが話題の中心となっている。三宅石庵、草間直方、山片蟠桃といった懐徳堂にまつわる人々の人物像や思想についてのナジタ氏の意見が、著者自身の見解も示しつつ紹介される。講演の開催された場所が経済学フォーラムであったことから、経済に結びつく話題が多く、三宅石庵らの思想についても、道徳論から経済論に至るまで幅広く述べられている。

商人たちの学問所　含翠堂

懐徳堂に先んじて創設され、懐徳堂と並行して日本の近代化を準備する役割を果たした学問所として含翠堂が紹介される。農村の危機にいかに対処するかを目的のひとつとして

飢饉救済運動を行い、民衆の自立を後押しした含翠堂の初代学主である土橋友直と懐徳堂で学んだ山片蟠桃の両者の思想において共通して訴えられている、万人への教育の普及の重要性について触れ、このような思想を持つことによって日本における近代化の基礎が築き上げられたことが主張されている。

貧困とは

18 世紀から 19 世紀初頭の日本が抱えた貧困問題と、第二次世界大戦敗戦後の数年の間に日本およびアジア諸国を襲った貧困問題について述べられる。第二次世界大戦で用いられ人々を苦しめた核兵器の恐ろしさに関して特に言及され、核兵器の廃絶や核燃料を用いた原子力発電の見直しが訴えられている。

《本書の意義》

本書では、全体を通して「鎖国してはならない」という主題を軸に、聴衆や読者に向けて語る姿勢が貫かれている。そのため、それぞれ性格の異なる講演および評論をまとめた書ではあるが、著者の意図が明確に伝わりやすい一冊となっている。

また、海外からの視点で言及される内容が数多くあり、懐徳堂に関連する記述の一部においても、日本以外の国の観点から懐徳堂の人々とその思想について述べられており、新鮮味を感じる内容となっている。（森田）

『自由学問都市大坂—懐徳堂と日本的理性の誕生』

（宮川康子著、講談社選書メチエ、2002 年、222 頁、1500 円）

「天下の台所」大坂の町人の知について、懐徳堂設立から閉鎖の時期まで記した書。全８章からなり、最後に参考文献、あとがき、索引を附す。

まず、「はじめに」で「天下の台所」大坂はどのような場所だったのか、そしてその中でうまれた町人思想・学問やその背景について述べ、本書を読み始める道しるべが示される。

町人学問所懐徳堂

元禄期の大坂の学問から懐徳堂の設立、そして「しつけ」の場から官許を得た学問所になるまでの道のりを述べている。町人学問所でありながらも、なぜ官許を得ようとしたのかについて特に述べられ、懐徳堂の目指した特殊な「学問空間」が記される。

江戸対大坂－知の権威への反抗

本章では、徂徠学批判を軸として、江戸と大坂の学問の違いを述べている。江戸の学問への批判を通じて懐徳堂は自らの学問を確立していった。そして懐徳堂の反徂徠思想は、徂徠の開いた新しい言語への視線を継承しながら、それをもっと開かれた民間の学問的基盤として発展させていったと指摘する。

富永仲基－夭逝の天才学者

本章では、徂徠学のもっとも鋭い批判者であり、民間の「無位の君子」たちの学問の方法を確立した富永仲基の思想を探っている。仲基の生まれから、加上の説、そして徂徠学批判のなかで見出され、懐徳堂によって受け継がれていった「あたりまえの理」について述べられる。

中井履軒と上田秋成－夢と虚講の世界

本章では、反徂徠の流れの中で、民間の知識人である中井履軒と上田秋成がどのように生き、学問を展開させたのかが述べられる。２人はお互いを批判しあい、次第に交友が途絶えていく。しかし、思想を比較してみると批判しあっていた２人の思想が、同じ知的空間に存在していたことが指摘されている。

心学と懐徳堂－二つの『かわしまものがたり』

本章では、石門心学批判が取り扱われている。懐徳堂の文献を中心とする学問を否定し、心で悟る学問を目指す石門心学。同じ町人階級から生まれた学問にも関わらず、根本的に異なるこの２つの学問が、どのように競合していったのかが比較分析されている。

武士無用論－中井竹山の『草茅危言』

本章では、中井竹山の『草茅危言』を中心に、民間の儒者たちの思い描いた理想の社会について述べられている。朝廷批判や武士批判を行い、そして天皇・朝廷から一切の宗教的呪術的要素を洗い流そうとした懐徳堂が、普遍的知の立場から日本という国家をどのように捉えていったのかについて記される。

近代的知の濫觴－懐徳堂の洋学

本章では、懐徳堂と洋学の出会い、そしてその受容について述べられる。物理の世界だけではなく、人倫世界への視点もかえていく朱子学的なものの見方が、大坂という都市で、儒学との関わりの中で、どのように受容され学問として展開されていったのかが紹介されている。

理性と合理主義－山形蟠桃『夢の代』の世界

本章では、山形蟠桃の『夢の代』を通し、懐徳堂の知の到達点を探っている。その中でも蟠桃の自信の発明と思われる天文と無鬼の章との２章を取り上げ、その発明と人間理性側に知の根拠をおく新しい視線とが紹介されている。

そして「おわりに」で、懐徳堂から適塾へと流れていく時代を記す。懐徳堂の人々をはじめとする民間の儒者たちによって築かれた「大坂の知」の可能性について触れられ、本書はしめくくられる。

《本書の意義》

本書では各章とも、前章を踏まえたうえで述べられており、「はじめに」から「おわりに」までが一本の筋となり構成されている。また、歴史的背景や基本的知識も随所に盛り込まれている。そのため大変読みやすく、また本書１冊で懐徳堂の始まりから終わり、そして懐徳堂の残したものについて理解が得られるため、これまで懐徳堂に触れたことのない人におすすめしたい１冊である。また、食や芸能でのイメージの強い大阪を自由な学問都市ととらえた見方は斬新であり、大阪について新しい発見ができるだろう。　（藤野）

『ニコライ堂の女性たち』

（中村健之介・中村悦子著、教文館、2003 年、576 頁、3200 円）

明治から大正にかけて、創立期の日本正教会で活躍した７人の女性信徒たちの伝記。

構成

全体は７章より構成され、最後の第７章が中井終子（しゅうこ）の伝記に充てられている。巻末には人名索引、陰陽露暦対照表、年譜を付す。また、本文の各所において貴重な写真、家系図などが多く掲載されている。注も詳細である。

中井兄妹の来歴

本書において懐徳堂に関する記述は、当然ながら中井終子（1877-1955）の章に集中している。懐徳堂最後の学校預人を務めた中井桐園の子で、履軒の曾孫に当たる木菟麿（つぐまろ）（1855-1943）は、明治 11 年（1878）に大阪で初めて正教の洗礼を受けた 35 名の内の一人で、後に大主教ニコライ（1836-1912）と共に新約聖書・祈祷文などの邦訳に携わった。実妹には蘭（1856-1942）がおり、専ら中井家の家政に携わった。終子は木菟麿と蘭の異母妹に当たるが、長く正教会の東京女子神学校と自宅私塾で教鞭を執り、帰阪後は兄と共に梅花高等女学校で教職に就いた。

正教会における中井兄妹の活動

本書の「まえがき」にもあるように、他のカトリックやプロテスタント諸派が、専ら欧米文化の魅力を前面に押し立てて布教を進めたのとは異なり、本国ロシアにおいても保守性の強かった正教会は、神学校でも和漢古典の学習を重視し、日本の伝統文化を軽視することはなかった。「正教は儒教の到達すべき極地なり」と述べ、儒教的教養の中にキリスト信仰を包摂しようと努めた木菟麿は、こうした環境の中、終子と共に信徒たちの大きな尊敬を勝ち得ていた。終子は、自らの豊かな漢学の素養を基に、教会附属の東京女子神学校において教壇に立つ一方、他の女子教員たちと「夕秀舎（せきしゅうしゃ）」と名付けた歌会を主催すると共に、自宅では「楓幃女塾（ふういじょじゅく）」を開き、広く清国留学生にも教えを施した。ここに、優れた教養と指導力を持った教師としての終子の姿を認めることができる。

懐徳堂の復興と中井兄妹の晩年

こうした順調な教会生活の一方、木菟麿は懐徳堂および水哉館の復興をも熱望していた。ニコライは、この木菟麿の望みにも温かい理解を示し、中井家伝来の膨大な遺品を保管するため、主教館の一室を貸し与えていた程であった。明治 43 年（1910）の懐徳堂記念会設立をもって、木菟麿の悲願は一旦成し遂げられたかに見えたが、それは木菟麿が望んでいた儒学と神学の融合の場としての家塾ではあり得なかった。その一方で、木菟麿と終子が未来を託していた東京女子神学校と京都正教女学校は、ニコライの死やロシア革命、関東大震災などを契機として衰微し、次々と閉校していった。終子は晩年、南刀根山の自宅で「水哉館」と名付けた私塾を開いたが、振るわずに間もなく閉鎖された。家塾再興の夢叶わず、経済的困窮に沈みながらも、やがて心穏やかに人生の終わりを迎える老境の中井兄妹の姿は、読む者の心を打つ。

《本書の意義》

本書は、あくまでも日本正教会の歴史を主題としたものであるが、明治以降の中井家の歩みと、重建懐徳堂開設の経緯を知るのに、恰好の資料たり得るだろう。また、中井兄妹の書き残した日記を初めとする記録類は多数にのぼり、懐徳堂に関する事績のみならず、明治期のキリスト教史、日露・日中文化交流史などを考える上で、その解読・研究が待たれる所であるが、そのさきがけを成した点でも、本書の意義は高く評価され得る。（三谷）

『懐徳堂知識人の学問と生—生きることと知ること—』

（懐徳堂記念会編、和泉書店、2004年、172頁、2500円）

中井履軒や富永仲基など、懐徳堂に集った知識人たちについての講演録。子安宣邦氏、中村春作氏、久米裕子氏、辻本雅史氏、宮川康子氏５名の講演が記されている。そのうち子安氏、辻本氏の原稿は「です・ます」体で記されている。以下各講演（各章）ごとの内容を紹介する。

懐徳堂知識人の学問と生（子安宣邦氏）

本章では、学問史研究、思想史研究に触れながら、知識人成立について、そしてその成立基盤としての商都大阪について述べている。知識人とは時代に対する批判的な知を共有し、それにより再構成された知識を人々に代わって世に提示することを責務とする存在とし、朱子の経書注釈を批判的に吟味した履軒をはじめとした懐徳堂の人々には批判的な知の所有者としての知識人が成立していると述べられる。

反徂徠としての懐徳堂知識人（中村春作氏）

本章では、「反荻生徂徠」を軸とし、懐徳堂に代表される「折衷」的儒教普及の意味を思想史的視点から考えている。豊後の儒者帆足万里の例を提示し、懐徳堂の知が九州の一地方にまで共有され、広範なネットワークが形成されていたことを示し、「反徂徠」運動のなかで近代啓蒙知に近づく知識人社会の先駆けが出現したと指摘する。

中井履軒の天文学とその背景（久米裕子氏）

本章では、中井履軒の天文学について、時代背景を取り混ぜながら述べている。コペルニクスなどの西洋天文学、そして中国天文学の発展に触れながら、いち早く地動説を取り入れた山形蟠桃、その師中井履軒が西洋の近代天文学を取り入れ研究を進めつつも、儒者としての立場を守り、朱子学の精神と西洋科学の思想を結びつけたことが指摘される。

梅岩心学と懐徳堂知識人（辻本雅史氏）

本章では、石田梅岩と石門心学の特徴を中心として述べ、その上で懐徳堂教育と比較している。文学、書物の権威に拠らない教説の石門心学と異なり、懐徳堂は既成の学問の枠の中で知的世界を構築する。それにより身分・制度を越えた外に開かれた普遍的知性を持ち、懐徳堂は西国の知識人ネットワークの中心に位置したと指摘する。

市井の君子富永仲基（宮川康子氏）

本章では、富永仲基の生まれから名もない隠君子として大阪に生きた経緯や仲基の徂徠学批判の展開、そのなかでどのように「加上の説」が生まれたのかについて、大阪という都市を一つの背景としてとりいれながら述べている。仲基は徂徠批判にとどまらず、徂徠が未定見のまま示した言語論を学問の方法として徹底させようとした。大坂という江戸とも京都ともちがう新しい大都会において、無位の君子であったがゆえ、自由な批判的精神を養ったことが述べられる。

最後には平雅行氏により編集後記が記されている。

《本書の特色》

本書は講演録ということもあり、講演のまま「です・ます」体で書かれているため文章が分かりやすく、また基本情報も各所に盛り込まれていることから、初めて懐徳堂に触れる人々にとっても手に取りやすい１冊である。しかし、各章とも内容・専門的度合いの幅

が大きいためまとまりに欠ける印象も受けるが、それぞれ切り取り方が異なっているため興味深い内容となっている。（藤野）

『京 大坂の文人 続々』

（菅宗次、和泉書院、2008年、212頁、2800円）

幕末の時代を生きた京大坂の文人たちについて、彼らの著作の紹介を中心に様々な角度からとらえた書。巻末には「初出一覧」を附す。

先んじて、和泉書院より 1991 年に『京大坂の文人』、2000 年に『京大坂の文人　続』が出版されており、本書はその続編にあたる。前著における懐徳堂に関する内容としては、『京大坂の文人　続』の中で６章「幕末における山片家と懐徳堂―四水館をめぐって―」として、山片家と懐徳堂ゆかりの人々との関わりが、山片家の別荘である四水館での彼らの交流を中心に述べられている。また、この章では清水中洲による『四水館記』についても言及されており、当時の四水館の様子をうかがい知ることができる。

本書では、８章「尼崎の儒医西村榕園と懐徳堂」（110 頁～ 134 頁）の中で、懐徳堂について述べられる。以下、その章の内容を紹介する。

一「五井蘭州と尼崎」

懐徳堂の中心的人物の一人である五井蘭州と尼崎藩との深い繋がりが示される。これまで学派の違いにより、希薄であると考えられていた尼崎の人々と懐徳堂との関係は、実際には浅いものではなかったことが述べられる。

二「鴨田白翁と西村榕園」

尼崎藩の郷校で教鞭をとった鴨田白翁と、その門人の西村榕園について述べられる。彼らと懐徳堂との交流に関して特に言及されており、西村榕園による『白翁先生遺稿』から多数の引用を示すことで、両者の具体的な交流が紹介される。

三「懐徳堂と西村榕園」

隆盛期の懐徳堂に学んだ西村榕園の直筆本の中に書き写された懐徳堂の詩や文を手がかりに、当時の懐徳堂で門人たちが学んだことについて具体的に述べられる。

四「懐徳堂と尼崎」

尼崎の人々が大坂に赴き、懐徳堂で学んだ理由について著者の考えが述べられる。その理由とは、次の二つである。一つ目には、尼崎の小規模な郷校での教育課程を修了した者のうち、より高いレベルの学問を求めた人々にとって、大坂の懐徳堂は近隣で最も適した学問所であったことが挙げられる。そして二つ目としては、もし望めば、大坂では懐徳堂での漢学修行と共に、医学修行をすることも可能であったことが示される。

《本書の意義》

本書には、多数の貴重な資料が引用して掲載されており、それぞれの資料には著者による詳細な説明が加えられている。ただ事実のみを紹介するのではなく、資料を元に著者の的確な考察がなされているため、興味深い内容となっている。

幕末の時代背景および当時の文人たちに関する基礎知識があれば、本書への理解がより深まるだろう。ぜひ基礎知識を身につけた上で、読んでもらいたい一冊である。（森田）

『墨の道　印の宇宙　懐徳堂の美と学問』

（湯浅邦弘著、大阪大学出版会、2008 年、161 頁、1700 円 ）

これまで語られることのなかった懐徳堂にまつわる墨と印章について、懐徳堂の学問との関連から記されおり、懐徳堂の墨と印の世界への案内書といえる一冊。本書は三部から構成されているのであるが、第一部については懐徳堂の歴史を重要なトピックに凝縮して解説してあり、懐徳堂をよく知らない読者にとって、後の二つの部への導入となっている。

一、大坂町人の学校

先程述べたように、江戸時代から現代までの懐徳堂の歴史をギュッとまとめたのがこの部であり、多くの画像資料と共にその理念や重要人物について記されているため、懐徳堂の基本的な知識を得るには誂え向きと言えるであろう。更に、末尾には「懐徳堂小辞典」と題して、第一部に出てきた人名や論考など重要語句についての注記が設けられており、漢籍や江戸時代の学問事情に明るくない者にとってはありがたい。

二、奈良 大阪 墨の道

夏目漱石の句を導入に、古梅園からの墨型の漢文解読の依頼に始まった、懐徳堂と古梅園の関係についての論考が、順を追って謎解きのように記されている。始めに創業 400 年の歴史を持つ古梅園での墨の製作工程について、取材をもとに多くの写真資料を交えながら説明されている。十分に時間をかけた伝統的な製法は興味深く、墨が日常においてあまり身近でなくなってしまった今、墨に関して使用の面以外から知ることができるのは新鮮に思われる。本題である二つの墨型については、各々漢文の意味を詳細にとった上で、どのような歴史的背景の下それらが記されたのか述べられており、実は日本史上の大事件と密接に関わる内容であること、また懐徳堂と徂徠学との対立という当時の学問状況を反映していることが明らかにされている。その他にも、新たな中井甕庵の墨の発見や、資料から分かる懐徳堂と古梅園の繋がりについて記されており、懐徳堂の歴史的意義が高まりをみせていることが分かる。

三、印章の中の小宇宙

ここでは、200 点を越える懐徳堂の印章の中から 15 点を取り上げて、細かな点にまで注目して特徴が記され、それらに込められた懐徳堂の学術的特色や歴代教授の性格まで言及されている。印章という小さなものに学者たちの徳がしのばれることは、まさに「小宇宙」のようで興味深い。この部においても、始めに篆刻と印章についての基礎知識をまとめてあり、読み進むと意外と私たちが「はんこ」について知らないことに気づく。歴史や用語を知っておくことで、後に説明される印章、一つひとつについての理解が深まるであろう。また、中井木菟麻呂が成立に関わった『懐徳堂印存』という中井竹山から桐園まで歴代教授の印影を集めた印譜についても触れ、その資料としての貴重性を評価している。取り上げられている印章は、紐がガラス製であったり、生き物をかたちどっていたりと、

その形を追うだけでも楽しいものが多い。末尾には「懐徳堂印章ギャラリー」が設けられ、本文中にとりあげられた印の他で特色のあるもの 14 点について解説されているほか、WEB 懐徳堂の紹介も附記されていて、懐徳堂の印章について更に興味が湧くようになっている。（神野）

『江戸時代の親孝行』

（湯浅邦弘編著、大阪大学出版会、2009 年、225 頁、1800 円）

懐徳堂を中心として江戸時代における「孝」を振り返ることにより、「孝」について様々な観点から考える書。第一部から第三部で論考し、最後に第四部を付している。

第一部「江戸時代の親孝行」

第一部では、まず、五人の子供が親の身代わりになって罪を贖おうとした「かつらや事件」について書かれている。そして、それについて書かれた、中井甕庵『五孝子伝』と、大田南畝『孝義録』や森鷗外『最後の一句』とを比較している。それにより、甕庵が「孝」という視点を重視していることについて述べている。次に、その「孝」とは、中国の古典に基づくものであるとして、『論語』や『孝経』を引用して、「孝」について説明している。そして最後に、「孝」の重視については、甕庵のみに見られるものではなく、懐徳堂全体に見られるものであることを、「孝子義兵衛」を取り上げた懐徳堂の孝子顕彰運動などで説明している。そこでは、孝子の行いの表現が、中国の古典に見られるものであること、また、懐徳堂の孝子顕彰運動が、地域的・時間的に広がっていったことにまで、話が及んでいる。

第二部「江戸文化にみる親孝行」

第二部では、江戸時代の文化において、「孝」がいかに題材とされていたかを述べている。取り上げているのは「舞台芸術（浄瑠璃・能・狂言）」、「落語」、そして「工芸（絵画や彫刻など）」の三項目である。ここでは「孝」が他の徳目と背反し、苦悩してしまう例を、「舞台芸術」では『国姓爺合戦』（孝と孝）、「姥捨山伝説」（孝と法）、「鶏猫」（孝と忠）で、「落語」では「袈裟御前」（孝と貞）で、「工芸」では「二十四孝」郭巨埋子譚（孝と慈）で挙げている。例えば「鶏猫」では、主君の可愛がっていた猫を殺した親を、犯人として密告した子供が、褒美として親の罪を許して欲しいと願う話である。それにより「孝」と「忠」との対立に話を進め、それが昔から中国においても問題になっていたことを、『論語』や『韓非子』、『呂氏春秋』によって説明している。

第三部「終わりなき「孝」」

第三部では、「孝」と葬儀・祭祀とについて、主に、中井甕庵『喪祭私説』を朱熹『家礼』と比較させて論じている。まず、祭祀の空間について、懐徳堂ではどう扱われていたかを、創立時や再建時の懐徳堂、また重建懐徳堂によって考えている。それにより、例えば「祀堂」として独立させるべき建物を、家屋の一室でいいとするなど、「孝」の精神は

活かしながらも、実行については柔軟に変化させていったことを明らかにしている。次に、葬儀について、仏式の葬儀を、「神主（しんしゅ）」を中心にして説明している。そして、作成方法を簡単にするなど、「神主」の改変について、『喪祭私説』によって述べた上で、日本の風習に合わせて改変していくことは、懐徳堂に留まらず、懐徳堂以前にもあったことを、崎門学派によって述べている。また最後に、現代における葬儀にも言及している。

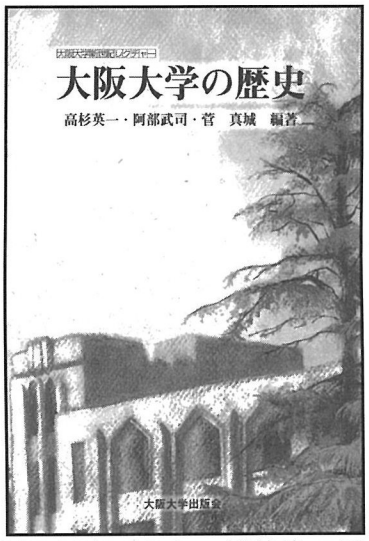
第四部「「孝」辞苑」

第四部では、『論語』『孝経』『大学』『中庸』『礼記』『孟子』の六つの中国古典から、「孝」にまつわる言葉や人物を取り上げている。そして、「孝とは何か、不孝とは何か」、「親子間の孝」、「政治と孝」、「聖人と孝」の四つに分類し、解説を施している。末尾には項目索引や五十音索引が付されている。

《本書の意義》

懐徳堂における「孝」を中心に取り扱った初めての書物であり、懐徳堂がどう「孝」について考えていたかを窺える、貴重な書である。また、懐徳堂以外にも、広く江戸時代における「孝」について触れており、日本でどう中国の思想が受容されていたのかについても、知ることができる。（竹村）

『大阪大学の歴史』



（高杉英一・阿部武司・菅真城編著、大阪大学出版会、2009年、214頁、2100円）

大阪大学の学生向けに、大阪大学の歴史を学ぶ教科書として編纂された書。大阪大学の精神的源流を懐徳堂と適塾に求め、大阪大学のこれまでの歩みと、これから目指すべき方向性が示されている。本書は全18章で構成され、第4章「懐徳堂から大阪大学文学部へ」（執筆者：湯浅邦弘氏）の中で、懐徳堂の創設からその後の廃校と復興、そして最終的に大阪大学文学部へ継承されるまでの経緯が叙述されている。

「1.懐徳堂の隆盛と教育」

本節では、①主要人物、②施設と運営、③授業内容、④学則の四方面から、懐徳堂の活動とその特色について述べる。まず、中井竹山・履軒をはじめとする懐徳堂の主要人物とその先進的な業績について紹介し、懐徳堂は関西における「知」の拠点であったとする。次に、懐徳堂の設立と運営が大阪の町人（商人）の手で行われた点に着目し、いわゆるメセナ活動の先駆であったと位置づける。さらに懐徳堂では、儒教の経典を中心とする正式な講義のほか、自主的な勉強会や教授を囲む談義の場も設けられるなど、多様な学習形態が取られていたとする。そして最後に、懐徳堂の学則は、伝統的な儒教道徳を背景としながらも、当時としてはかなり自由な内容であり、「士農工商」という身分制度にもとらわれず、学生相互の自律・自助を促す内容であったと述べる。

「２．懐徳堂の閉校と再建」

続けて本節では、懐徳堂が閉校となってから復興を遂げるまでの間、懐徳堂の精神と蔵書がどのように引き継がれたのかについて叙述する。幕末の混乱で懐徳堂は廃校（1869年）となるものの、中井木菟麻呂や西村天囚などの活動によって、1910 年に懐徳堂記念会が設立される。懐徳堂の重要図書が復刻刊行されるとともに、1913 年には懐徳堂の学舎も再建（重建懐徳堂）。さらに、1926 年には書庫・研究室棟の増設と大量の懐徳堂貴重資料の寄贈により、当時、まだ帝国大学がなかった大阪で、懐徳堂は名実ともに大阪の市民大学となる。そしてその後、1945 年の大阪大空襲によって懐徳堂の学舎が焼失するものの、懐徳堂文庫は奇跡的に災禍を免れ、次の大阪大学へと継承される。

「３．大阪大学への継承」

最後に本節では、大阪大学へ継承された懐徳堂の精神と蔵書が、現在どのように活かされ、また、一般に公開されているのかについて紹介する。大阪大学文学部の創設を機に、懐徳堂記念会は貴重資料を一括して文学部に寄贈（1949 年）。また、市民を対象とする公開講座も、記念会と大阪大学の協力のもとに継続される。さらに長年の資料調査によって懐徳堂文庫の全容が明らかとなり、その成果は『懐徳堂文庫図書目録』として刊行される（1976 年）。そして現在では、インターネット上の懐徳堂研究の総合サイト（「ＷＥＢ懐徳堂」）にて懐徳堂貴重資料のデーターベースを公開するなど、デジタルコンテンツを中心とした新たな公開の方法が試みられている。

「コラム．大阪大学附属図書館と懐徳堂文庫 」

「コラム」では、懐徳堂の貴重資料が現在の所蔵場所である大阪大学附属図書館（新館）に移転されるまでの経緯が記され、併せてその作業の様子と関係者の苦労が綴られている。

《本書の特色》

本書は、懐徳堂に関する専著ではないものの、懐徳堂に関する基本事項とその歴史が簡潔に記されているため、懐徳堂の入門書としての機能を十分に備えている。また、単に懐徳堂の歴史を学ぶというだけなく、懐徳堂と現代の私たちとの関わりについても知ることができる。「コラム」の末尾において著者は、懐徳堂文庫の新館への移設に際し、「それは単なる「もの」の移動ではない。懐徳堂精神の継承である」と述べる。懐徳堂の精神とその精華たる懐徳堂文庫は、数え切れないほどの多くの人々に支えられ、守り継がれてきた。そうした精神文化の継承についても、あらためて考えさせられる内容となっている。

（福田）

『市民大学の誕生－大坂学問所懐徳堂の再興』

（竹田健二著、大阪大学出版会、2010 年、284 頁、2100 円）

明治期における懐徳堂復興運動を中心に論じた書。幕末に廃校となった懐徳堂が、明治期に重建懐徳堂として再興され、大阪において「市民大学」的活動を展開する過程が描かれている。「一、大坂学問所」・「二、懐徳堂の復興」・「三、中井木菟麻呂と懐徳堂記念会」

の３部よりなるが、本論の中心は、懐徳堂復興運動の経緯を記す第２部と、その運動に尽力した中井木菟麻呂（つぐまろ）の事蹟を記す第３部である。

「一、大坂学問所－懐徳堂の歴史」

第１部では、江戸期における懐徳堂の創設から幕末の閉校に至るまでの懐徳堂の歴史が概説されている。本書の中心は、第２部・第３部で述べられる明治期の懐徳堂復興運動にあり、第１部はそのプロローグにあたる。

「二、懐徳堂の復興－懐徳堂記念会と財団法人懐徳堂記念会」

第２部では、明治期における懐徳堂復興運動を通して、財団法人懐徳堂記念会が設立されるまでの経緯と、同会が重建懐徳堂にて行った「市民大学」とも呼べる教育活動について記される。

懐徳堂は幕末に閉校となるものの、明治期にそれを顕彰する気運が高まり、懐徳堂記念祭の執行を目的とした懐徳堂記念会が発足する。同会の結成には、西村天囚と彼の所属する大阪人文会が深く関わっていたが、人文会の具体的活動については、これまで不明な点が多く残されていた。著者は新資料を用いて、人文会の活動、及び人文会と記念会との関わりを明らかにし、詳細かつ体系的に懐徳堂記念会の活動を描き出す。

また、記念祭の開催後、その余剰金をもとに組織された財団法人懐徳堂記念会は、重建懐徳堂を設立し、大阪の市民に向けて漢学を中心とする教育活動を展開した。著者は、そこで行われた教育活動について、教師陣・授業内容・講義方法・聴講者・授業料などの各方面から分析を加え、それはいわゆる「市民大学」のさきがけであったと位置づける。そして、重建懐徳堂が目指した漢学による「徳育」（道徳教育）は、かつて江戸期の懐徳堂が行っていたものであり、明治期に懐徳堂の復興が提唱されて懐徳堂記念会の成立や重建懐徳堂の設立に至ったのも、この「徳育」の必要性が大阪の人々の賛同を得たためと指摘する。

「三、中井木菟麻呂と懐徳堂記念会」

第３部では、中井家の子孫である中井木菟麻呂に焦点を当て、彼の日記『秋霧記』を通して、木菟麻呂と懐徳堂記念会との関係を浮き彫りにする。

懐徳堂顕彰運動は、西村天囚を中心とする懐徳堂記念会（及びその後身である財団法人懐徳堂記念会）によって継続されたが、その背後には木菟麻呂による多くの協力があった。にもかかわらず、記念会は基本的に木菟麻呂を組織外の人と位置づける。懐徳堂復興のために尽力した両者の間に、なぜこのような距離があるのかについては、これまで大きな謎であった。この問題に対して著者は、新資料の『秋霧記』を精査し、両者が思い描く復興運動にズレがあったことを指摘する。中井家の子孫であった木菟麻呂は、懐徳堂の学主をつとめた中井甕庵・竹山・蕉園などの中井家の先祖を顕彰することに主眼を置いていた。これに対して西村天囚は、懐徳堂は中井家の私学ではなく「浪華の公学」であると考えており、記念会も基本的にこの立場をとる。記念会側からすると、懐徳堂をよく知り、また、膨大な懐徳堂関係資料を所有する木菟麻呂の協力は、懐徳堂顕彰運動を推進する上で不可欠のものであった。しかしその一方で、木菟麻呂が前面に出ると、懐徳堂は中井家の私学

であるといった誤った認識が広がる恐れがある。こうした懸念から、記念会は木菟麻呂と距離を置くことになったのだと著者は推測する。

《本書の特色》

本書の特色としては、①明治期の懐徳堂復興運動自体を研究対象として論じた点、②新資料を活用して復興運動の経緯を詳細かつ体系的に復元している点、以上の二点を挙げることができる。懐徳堂に関する研究は、やはり江戸期を対象とするものが中心であり、明治期の懐徳堂復興運動自体を正面から取り上げて論ずることは、これまでほとんどなされてこなかった。本書では、多くの新資料を活用して懐徳堂復興運動の全容を解明することに成功しており、明治期の懐徳堂という新たな研究領域の可能性を示唆している。さらに本書の内容は、懐徳堂研究のみならず、日本近代教育史という分野においても貴重な資料を提供しているであろう。（福田）

3．文学作品

『富永仲基異聞—消えた版木』

（加藤周一著、かもがわ出版、1998年、261頁、2200円）

三教（儒仏神）に屈せずに自説を貫いた富永仲基を描く戯曲草稿。

あらすじ

著作『説蔽』の中で神仏儒を加上の説によって批判した富永仲基。彼はそれによって懐徳堂から破門されてしまう。その後『出定後語』を著し出版されるも、そんな折『説蔽』の版木が何者かに盗まれてしまう。神仏儒を批判したが故の言論封殺であろうと見た仲基は『説蔽』を下敷きにして、改めて「翁の文」を著そうとする。その結果、三教の関係者のみならず、幕府にも危険思想家として目をつけられてしまう。

テーマ

理解されない天才

仲基が提唱した加上説は、諸学兼修の懐徳堂であっても認められなかった。古の聖賢の言説を各々ただの一説としてしまい、絶対的な正しさを疑うものであったからである。また、それだけではなく、仲基の説には仏教、神道にも加上説からの批判と、秘伝口伝と称してやたらとものを隠すことへの批判が述べられていた。これについて仏教勢力神道勢力、そして官学として朱子学を教える幕府を憚って懐徳堂としては認めることができなかったのである。

大阪の学問

大阪の学問の雰囲気として本作では非常に自由であったことが述べられている。その自由であると言うことから懐徳堂を破門された仲基も出版版本として商人と付き合うことも可能であったし、仲基の学説が生まれたその背景になっていることもうかがうことのできるよう書かれている。

《本書の意義》

本書で著者はこの脚本は上演台本ではなく草稿であるとのべており、実際に1998年3月14～22日に東京芸術劇場、24日～26日に吉祥寺前進座劇場で上演された。懐徳堂と大阪の学問の空気を一般の人に知らしめるという意味で非常に大きい役割を担えたと言える。あくまで戯曲であり、フィクションを盛り込んだものであるため、また富永仲基からの視点であるため懐徳堂が固陋で保身にはしっているとの印象は受けるものの、大阪の学問について考える一つの入門として意義のある書である。　（久保）

4．図録

『懐徳堂―近世大阪の学校―』

（大阪市立博物館編、1986年、76頁＋口絵4頁）

1986年に大阪市立博物館にて開催された、第103回特別展の図録。

本書は、江戸期の懐徳堂がどのような変遷をたどり、終焉を迎えたかについて、「創設期」「中期」「後期」の三部に分けて解説している。以下にその内容を紹介する。

Ⅰ．懐徳堂〔創設期〕

第一部では、初代学主三宅石庵と学問所預り人中井甃庵を中心として、初期懐徳堂に関する内容が概説される。懐徳堂以前に開かれた石庵の私塾「多松堂」や懐徳堂の先駆けとして位置付けられる「含翠堂」についても紹介され、懐徳堂の創設や運営に様々な人物の協力があったことが述べられている。

Ⅱ．懐徳堂〔中期〕

第二部で解説される中期懐徳堂は、懐徳堂の全盛期にあたる。ここでは、学校の運営・復興に力をそそいだ四代目学主中井竹山と自らの学問を探究した弟履軒について、とりわけ詳細に記述されている。竹山に関しては、『草茅危言』を老中松平定信に提出し、また人別帳をめぐる問題に尽力するなど、経営面での活動を記す一方、漢詩の詩作法を論じた『詩律兆』や自身の生涯にわたる詩文集『奠陰集』、徳川家康の一代記『逸史』なども著していることを指摘する。履軒に関しては、私塾「水哉館」を開き、経学研究の注釈書である『七経逢原』や人体解剖解説図『越俎弄筆』などの医学関連書、また動植物を描き、その傍らに名称を記した本草書『左九羅帖』や天体図の作成など、幅広い分野において独自の研究を行い、多くの成果を残したことを述べている。

Ⅲ．懐徳堂〔後期〕

第三部では、竹山の子中井碩果や竹山の外孫並河寒泉・履軒の孫中井桐園らが懐徳堂維持のために奔走した事跡が記されている。後期懐徳堂は、碩果の運営能力により暫くの間経営を保持することができたが、次第に財政が逼迫し、積年の蔵書・什器類を売却するにいたった。そして、ついに明治2年（1869）創設以来140年続いた書院は閉鎖されることとなる。

附録について

巻頭には、三宅石庵筆「懐徳堂幅」・中井履軒筆「詠竹詩幅」・中井竹山筆「入徳門聯」・中井履軒手製「紙製深衣」の口絵カラー写真が掲載されている。巻末には、墓碑写真を掲げた「懐徳堂歴代の墓碑」、印影とその使用者・刻人とを明記した「竹山・履軒の略印譜」、懐徳堂に関する人物を一覧にした「懐徳堂同志・門人・交友一覧」、特別展に展示された品目を記した「特別展『懐徳堂－近世大阪の学校－』出品総目録」が附されている。

《本書の特色》

本書は、懐徳堂の前期・中期・後期と題された三部構成となっているが、内容の上では

江戸期を三期に分けて記述したものであり、重建期以降の展開については触れられていない。また、「懐徳堂」の由来について、『論語』里仁篇や『書経』周書洛誥篇が出典ではないかとの説もある中、『詩経』大雅皇矣篇がその出典であると明記している点にも注意を要する。しかし、展覧会で展示された資料（書物・掛軸・屏風など）を多く図版として掲載し、書状については解説の他に原文（手稿）を翻刻して示しているため非常に分かり易く、それらの器物・文書を通して経学以外にも多くの学芸に精通していた懐徳堂の人々の意欲的な姿勢が偲ばれる。さらに、各部の末尾には年譜が掲載されており、図録でありながら懐徳堂の歴史変遷を見渡すことができる点に本書の特色がある。　　（金城）

『《図録》懐徳堂—浪華の学問所』

（懐徳堂友の会・(株)懐徳堂記念会編、大阪大学出版会、1994年、85頁、2000円）

懐徳堂の成立から現代に至るまでの歩みを、その活動の舞台となった大阪の社会と深くからめながら、図版を使ってわかりやすくまとめた一冊。資料が多数掲載されており、目にも楽しい仕上がりとなっているが、一部資料説明に誤りが見られるため、注意が必要である。

近世日本と懐徳堂——総論

懐徳堂の意義は、町人により支えられ、後に官許を得た学問所ということのみに留まらない。その存在からは、大坂が当時の知的交流における一つの要所であったこと、また公的世界の再構成について独自の見解を述べられるほどに熟成された知が市井に育まれていたことが読み取れるとまとめている。

懐徳堂の成立

懐徳堂は、享保９年（1724）、五同志と呼ばれる町人たちを中心として、三宅石庵を初代学主とする学問所として設立された。この懐徳堂の成立初期について、大坂で塾を構えた五井持軒や三宅石庵ら、懐徳堂の支援者たちと社会的背景、そして当時の教育的前提の三つの視点から解説している。

学問所「懐徳堂」

代を重ねるに従い、懐徳堂は初期のしつけ寄りの教育から、より学問中心の教育へとその性格を変えてきた。こうして育まれることになった懐徳堂の学問について、懐徳堂の人物、そして懐徳堂周辺の人物たちの説明を通じて述べられている。また、こうして発展する懐徳堂が政治世界にどのような関わりを持ったのかについても言及している。

学問所「懐徳堂」の終焉

懐徳堂は第五代教授中井碩果以降、目立った学問的発達をとげなかったものの、ゆるみはじめていた講義日程の厳格化や、武士役人層の門人増加などの変化が見られる。しかし、幕末動乱期の財政逼迫、明治２年の新政府による懐徳堂の免税の解除といった動きによって経営は立ちゆかなくなり、懐徳堂は廃校となった。

懐徳堂の思想と近代

懐徳堂が廃校となってより 40 年後、大阪に懐徳堂復興の動きが起こった。西村天囚らの協力により行われた懐徳堂記念事業は成功に終わり、財団法人懐徳堂記念会が誕生する。この懐徳堂再建の動きにともなって、懐徳堂の思想を再評価しようという動きもあらわれた。

重建懐徳堂と懐徳堂文庫

財団法人懐徳堂記念会によって再建された重建懐徳堂では、授業のほか、活発な活動が行われていた。しかし第二次世界大戦中に書庫以外の建物が全て焼失するに至り、懐徳堂の再建が困難となったため、懐徳堂記念会は大阪大学に蔵書を寄贈し、懐徳堂事業を大阪大学と共同で行うこととした。この時寄贈された図書や器物類は、大阪大学懐徳堂文庫として現在まで保存されている。

口絵／懐徳堂の遺跡と遺物

巻頭の口絵では、書籍ばかりではなく懐徳堂関連の遺物、当時の地図などがカラーで多数掲載されている。また、巻末の懐徳堂の遺跡と遺物の章では、懐徳堂ゆかりの人々の墓碑や、実際に懐徳堂で使用されていた器物を見ることができる。

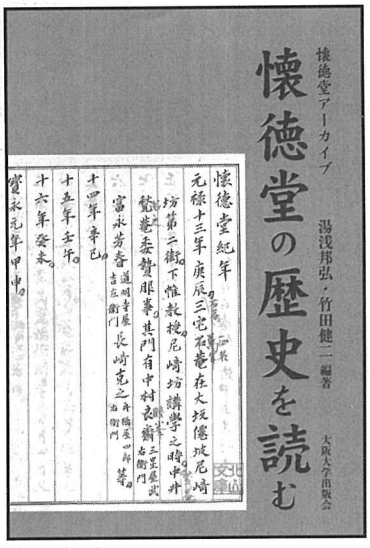
《本書の意義》

懐徳堂の歴史について纏められた図録ではあるが、内容は懐徳堂についてのみに終始せず、その背景にまで目が向けられているため、各時代において、社会のなかで懐徳堂がどのような役目を果たしてきたのかがよくわかる構成となっている。

成立から現在に至るまでを包括的にまとめているため、懐徳堂とは何かを知る入門に相応しい一冊である。

（畑中）

『懐徳堂アーカイブ　懐徳堂の歴史を読む』



（湯浅邦弘・竹田健二編著、大阪大学出版会、2005 年、60 頁、1050 円）

アーカイブという観点から懐徳堂の歴史とその魅力をまとめた書。平成十五年(2003)に大阪大学懐徳堂文庫が開放され、貴重資料やデジタルコンテンツを展示解説する「アーカイブ講座」がはじめて開講された、その成果をまとめている。全体の大きな構成は、前半では大正天皇に献上された懐徳堂の編年紀『懐徳堂紀年』に沿って、懐徳堂の大事件が取り上げられており、後半では懐徳堂の主要人物や重要資料について解説されている。また、巻末には懐徳堂についての諸情報をまとめた「懐徳堂問答集」が設けられている。以下、いくつかの章ごとにまとめて紹介する。

「懐徳堂の大事件」

「江戸時代」は竹田氏、続く「明治・大正・昭和前期」は湯浅氏の執筆による。デザインがその二部において異なっており、執筆者の違いがそのような所からも感じられる。時

代に沿って懐徳堂の長い歴史の中から重要な出来事（例えば「懐徳堂の創設」「松平定信の諮問」「懐徳堂記念会設立」など）に絞って題が立てられ、多くの写真図版とともに懐徳堂についての概略が説明されている。

「よみがえる懐徳堂の編年史－『懐徳堂紀年』－」、「綴じ込み『懐徳堂紀年』」

『懐徳堂紀年』とは、懐徳堂記念会から中井木菟麻呂が執筆を依頼されて成立し、元禄十三年(1700)から明治二年(1869)までの懐徳堂に関連する出来事を漢文で年表風に記しており、大正天皇に献上されたものである。平成十三年(2001)の懐徳堂文庫資料のデジタル・コンテンツ化に向けての調査まで忘れ去られた状態であったが、その調査を発端に新田文庫本、北山文庫本、宮内庁本の三つの『懐徳堂紀年』が見つかった。その発見の経緯や、その後の調査によって分かったことについて、謎解きのように記されている。『懐徳堂紀年』成立の解明の鍵が、挟み込まれていた一枚の原稿用紙であったことは興味深く、また大正天皇への献上についての懐徳堂記念会の沈黙の謎について、これからの研究の展開が気になるところである。また、三つの『懐徳堂紀年』うち、大阪大学附属図書館の懐徳堂文庫・北山文庫に収められている北山文庫本の冒頭と末尾の部分がカラーで影印されて綴じ込みになっており、木菟麻呂による本文の墨筆と、西村天囚による朱筆の修正が鮮やかに確認できる。

「今に生きる懐徳堂」、「懐徳堂を知る」、「懐徳堂問答集」

「今に生きる懐徳堂」の章では、懐徳堂を今に伝える三万六千点の資料が、大阪大学文学部設立を機に懐徳堂記念会から阪大に寄贈されて「懐徳堂文庫」なったこと、また文庫資料の電子情報化や関連書籍出版など、近年の活発な取り組みについて記されている。
続く「懐徳堂を知る」では、懐徳堂の著名人と重要資料について、それぞれ十人と十項目に厳選して紹介している。多くに図版が付されていて、図録のような形になっている。十人のうち一番目に挙げられているのは中井竹山で、懐徳堂の歴史の中で最も大きな仕事をしたとして、その輝かしい業績について記されている。一方、重要資料の十項目のうち一番目は懐徳堂幅で、三宅石庵の筆であることや「懐徳」という語の由来について解説がなされている。

そして「懐徳堂問答集」では、報道機関や一般の方からよく質問される事項について、その答えとなる情報が提示されている。大きく「江戸時代編」と「重建懐徳堂および平成の懐徳堂編」の二部に分けながら、25 の問答の形で、朱子学とは何であるかということから、現代社会における懐徳堂の意義やインターネットにおける対応状況まで、幅広い疑問に答えている。「授業の時の教授と生徒の服装は？」「受講生の遅刻・早退は許されたのか？」などユニークな問いもあり、現代の学校の状況と照らし合わせて考えてみると面白いのではないだろうか。

《本書の意義》

アーカイブの観点から懐徳堂についてまとめられているために、内容、図版ともに充実しており、普通図書と図録の中間ともいえる構成になっている。懐徳堂の歴史そのものだけではなく、新たに発見された『懐徳堂紀年』についても知ることができ、概説書としてだけではない内容を備えている。また、ジャッケトの裏を開くと「懐徳堂名言しおり」として懐徳堂にまつわる名言とその意味、懐徳堂再現図がデザインされており、点線で切り取ると七枚のしおりとして使用できる。細部までこだわりと遊び心が感じられる一冊であ

る。　（神野）

『龍野と懐徳堂』

（龍野市立歴史文化資料館編、龍野市立歴史文化資料館、2000年、90頁、1000円）

龍野市立歴史文化資料館特別展「龍野と懐徳堂―学問交流と藩政―」の図版。懐徳堂中井家のふるさと龍野と懐徳堂の関わりについて多くの資料により記されている。全3部から構成されており、はじめに龍野市長からのあいさつ、おわりに資料解説と協力者一覧を附す。

第Ⅰ部では、懐徳堂の設立や、教育・学問について述べられている。懐徳堂の平面図や記額、内事記をはじめ、講義の様子が描かれた絵や、肖像画、著書など、多彩な資料がのせられており、懐徳堂の基本的な知識を得ることができる。

第Ⅱ部では、懐徳堂の学問と龍野藩政の関わりについて述べられている。そもそも、中井家は18世紀始め大坂に出るまで龍野脇坂家の藩士であった。その後中井の家族たちが大阪へと移り住んだ。龍野には、懐徳堂に学び、懐徳堂の学問を藩政において実現しようとした子西惟仲などにより、学問を通して懐徳堂と龍野藩は関わりを持っていたが、龍野藩の藩主「暗殺」計画を中井が防いだことにより、藩主に直言できるなど、藩政にも一定の関わりを持つようになった、とする。中井家の墓碑や書簡、諸子略系などをはじめ、藩教育や藩政に関わる資料が数多く載せられている。

部の最後には参考資料として、懐徳堂関連年表、中井家及び龍野の諸家関連年表、系図を附す。

第Ⅲ部では、田淵俊介氏が「龍野中井家の人たち」、山中浩之氏が「龍野反　藩政改革と儒学者たち」、竹腰礼子氏が「文化八年の朝鮮使礼と中井竹山及び龍野藩の人々」という題目で執筆されている。第Ⅰ、Ⅱ部は文章が少なく、資料写真が中心となっているため、ここで龍野と中井家の関係やのせられている資料についての詳しい知識を得ることができる。

懐徳堂というとどうしても大坂との関わりを中心に見てしまうが、中井家のふるさと龍野との関わりという異なった一面を見ていくことにより、懐徳堂について新しい発見ができる。また、資料写真はほとんどカラーでのせられているため、資料の色の具合なども見ることができ、実物の資料を手に取るような感覚で読み進めることができる、とても興味深い一冊である。　（藤野）

『「見る科学」の歴史 - 懐徳堂・中井履軒の目 - 』

（大阪大学総合学術博物館編、大阪大学出版会、2006年、56頁（カラー口絵込）、1000円）

平成18年（2006）に大阪大学総合学術博物館で開催された〈「みる科学」の歴史 - 懐徳堂・中井履軒から超高圧電子顕微鏡まで〉展の手引き書としてまとめられた書。巻末には井上了氏・池田光子氏による「論考」を附す。同展で公開された資料が、池田光子氏（中

国哲学）・泉万里氏（日本美術史）・井上了氏（中国哲学）・日高薫氏（日本工芸史）・米田該典氏（薬用植物学・材質分析学）によって、懐徳堂研究はもちろん日本美術史や科学技術史など各氏の専門分野の視点から考察される。

履軒、その人を見る。（池田光子・泉万里）

「中井履軒像」、「懐徳堂額字」について説明される。「中井履軒像」の画幅に拓本として貼りこまれた履軒の墓誌銘の読解が示されるとともに、同資料が完成前の下絵であったことが述べられる。また「懐徳堂額字」を書いた三宅石庵の人物像について触れられる。

履軒、自然界の森羅万象を見て、博物図譜を著す。（泉万里・池田光子）

博物学が日本の知識人の中で流行した 18 世紀に、その風潮に乗る形で生まれた博物図譜「左九羅帖」と、その解説書「画觿（えくじり）」について説明される。博物図譜を作成する際に、対応した解説書を同時に作られた目的は、読者が受け入れやすいようにという配慮からだろうという考えが示される。同時に、両資料における図を描いたのは誰なのか、その正体についても考察が行われている。

履軒、獣体解剖を見て、人体解剖図を描く。（池田光子・泉万里）

中井履軒が著作した医学書「越俎弄筆」と、その草稿であると考えられる「越俎載筆」について説明される。構成や、図の描かれ方に関して解説されるとともに、履軒が医学研究に携わった経緯についても触れられている。

履軒、天を仰いで、天体モデルを作る。（池田光子）

履軒が作成した天体模型である「天図〔紙製〕」・「天図〔木製〕」、「方図」および天体や方位に関する図である「天体図解」について説明される。天体の構造を解き明かすために作成された、これらの資料の解説を通して、履軒の興味は天文学の分野にまで及んでいたことが示される。ただし、「天体図解」については、未だ明らかになっていない内容が多く、作成したのは本当に履軒なのかという点に関しても疑問の意が添えられている。

履軒、顕微鏡を覗いて、極小の世界を見る。（米田該典・泉万里・池田光子）

履軒も用いたであろう「江戸時代の顕微鏡」と、履軒によって記された、顕微鏡に関する日本最古の資料である「顕微鏡記〔定本〕」・「顕微鏡記〔稿本〕」について説明される。顕微鏡制作の背景から、顕微鏡に施された装飾に至るまで幅広い内容が解説される。

履軒、机辺の道具を愛する。（池田光子・泉万里・日高薫）

履軒が愛用した道具である「象紐の印」、「博山香炉」、「青貝印匣（あおがいいんこう）」、「螺鈿算盤」について説明される。これらの道具の構造や、その役割に関する考察を行うとともに、当時の文人の間で高まっていた文房具への関心に関しても述べられる。

《本書の意義》

本書は、展示のための手引きとなることを目的として作成されたため、掲載された資料には、それぞれ展示と対応した資料番号が付されており、展示を観賞する際のガイドブックとして非常に利用しやすいものとなっている。

また一方で、カラー口絵として本書で紹介される全ての資料が掲載されており、一冊で実

際の資料とその説明の両方を楽しむことができる。そのため、展示を見に行く機会を逃した人にも是非お勧めしたい本である。（森田）

『懐徳堂の印章』

（湯浅邦弘責任編集、大阪大学大学院文学研究科、2007年、65頁）

懐徳堂伝来の印章21顆について紹介し、解説を施した図録。

構成

全体は、「序文」「凡例」「本文」「附録」から構成されている。

「本文」は、印章の所持者により、中井竹山（６顆）、中井履軒（７顆）、中井蕉園・碩果（３顆）、中井柚園・桐園（４顆）、中井木菟麻呂（１顆）の各章より構成されており、その冒頭には所持者の経歴が附されている。なお、印章の掲載順については、三冊本『懐徳堂印存』に従っている。

各印章の説明については、それぞれ「解説」「三冊本『懐徳堂印存』該当ページ写真」「印紐写真」「印面写真」によって構成され、１顆につき２頁が割り当てられている。（ただし『印存』に収録されていないものは『印存』該当ページ写真を欠く。）

そのうち「解説」については、印文の後に、（一）篆字、（二）印面の大きさ、（三）形・印面・技法など、（四）『懐徳堂印存』三冊本・二冊本・七冊本における葉数及び注記、最後に出典・典拠・注釈・その他が記されている。

なお、巻末には附録として、（一）用語解説、（二）『懐徳堂印存』解題、（三）『懐徳堂印存』序が掲載されている。

簡潔な解説と鮮明なカラー図版

「序文」によれば、懐徳堂文庫に所蔵されている印章について、その印譜である『懐徳堂印存』の存在が知られていたが、実物そのものの調査研究はほとんど進んでいなかったため、200を超える印章を整理しつつ、『印存』との対照作業が進められたと言う。

いずれの印章の図版も、カラーで鮮明に捉えられており、簡潔ながらも充実した解説と合わせて読むと、印章そのものに対する愛玩の向こうに、懐徳堂の辿った物心両面における歴史をも透かし見ることができるだろう。

電子データベースとの連携

なお、本書は、平成18年度「懐徳堂デジタルコンテンツ制作事業」および「懐徳堂「印章」の総合調査と電子情報化」の成果の一部として作成された。「ＷＥＢ懐徳堂」（http://kaitokudo.jp/）には、それらの事業の成果として、15顆の印章の3D画像と共に、『懐徳堂印存』における中井竹山および履軒の部の全ての本文と、それに該当する印章と印面の画像が、データベースとして公開されている。

本書はあくまでも小冊子であるため、印章の掲載数そのものが少ない憾みはあるが、上

掲の電子展示を合わせて閲覧すれば、懐徳堂の印章について、より多くの知見を得ることができるだろう。

より深い知識を得たいと望む読者には、別項で取り上げられている『墨の道　印の宇宙　懐徳堂の美と学問』（湯浅邦弘著）の併読を勧める。　（三谷）

5．事典

『大阪墓碑人物事典』

（近松譽文著、東方出版、1995年、310頁、2957円）

大阪府内に残る歴史上の人物の墓碑をまとめた書。主に近世から近代にかけた時代の人物についてまとめられている。内容は墓地の所在地ごとに分類されており、巻末には人名索引もつけられている。懐徳堂に関係する人物以外も多く記載されているため、ここでは特に懐徳堂関連の人物についての記述のある部分のみ紹介する。

天王寺区

懐徳堂関連人物の墓碑が最も多く残っている地区。五井蘭洲、片山北海ら９名の墓碑について記載されている。懐徳堂の門人であった人物たちについては“門人”等の記述があるものの、中井竹山と交流があったと思われる、というレベルの人物となると、やはり懐徳堂との関わりについての記述は見られない。

中央区

懐徳堂学主を数多輩出した中井家の墓がある。中井甃庵から並河寒泉まで、７名が記載。解説も比較的たっぷりと取られており、著作や生前の人となりなどについても軽く触れられている。

北区／淀川区／八尾市

それぞれ北区は山片蟠桃、五井持軒、淀川区は蔀関月、上田秋成、八尾市は三宅石庵、三宅春楼について記載されている。懐徳堂の運営に直接関わった石庵や、門人であった蟠桃、秋成の部分には懐徳堂についての言及があるものの、やはり関係の薄くなるその他の人物の説明からは、懐徳堂との関わりを読み取ることはできない。

《本書の特色》

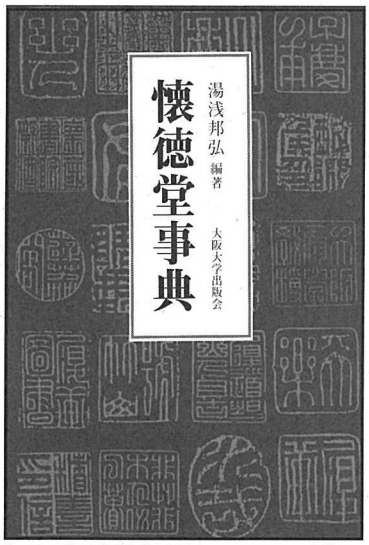
この書はあくまで近世大阪の著名人墓碑をまとめたものであるため、懐徳堂について知るための資料としては、この書一冊のみでは不十分である。しかし、懐徳堂についての資料を紐解く際に登場する、当時の大坂の知識人たちとその繋がりについて調べるには、非常に役に立つ書であると思われる。（畑中）

『懐徳堂事典』

（湯浅邦弘編著、大阪大学出版会、2001年、271頁、2800円）

懐徳堂に関する諸情報を解説した「読む事典」。全体が懐徳堂の歴史と内容に基づいて八つの章に分けられており、歴史について記した前半の五章はさらに細かく節を設けている。まず章・節の始めに簡潔な概説が記され、その後概説に用いられた語句または関連する語句を項目立てて詳細に解説、という形で構成されている。項目は五十音順ではなく、各章の内容を理解しやすいよう、時代を追ってもしくは関連づけられて並んでおり、多く

の事典の五十音順で項目が並ぶ形式とは異なっている。その項目数は人名九十六、事項二百十四、資料百五十一の計四百六十一。懐徳堂についての厖大な情報がこの一冊に詰まっている。



出版の経緯

大阪大学が平成十三年(2001)に創立七十周年を迎えるにあたっての記念事業が、本書出版の発端である。記念事業として、マルチメディアコンテンツ実行委員会が特設され、大阪大学の源流としての適塾と懐徳堂がマルチメディア技術によって顕彰されたのであるが、事業の一つとして、「懐徳堂研究会」により大阪大学付属図書館蔵、懐徳堂文庫の関連資料の実見調査と解題執筆がなされ、懐徳堂データベース「新懐徳堂」が構築された。その際、解題の文中に登場する重要語句について一括して解説文が書き下ろされ、それが「懐徳堂事典」としてデータベースに収録されることとなった。その時点では約百項目にとどまっていたのであるが、データベース公開の際に刊行して閲覧したいとの要望が寄せられ、それに応える形で再編。懐徳堂の全貌を概観できるように項目数を大幅に増やし、構成が工夫されて出版に至ったのである。

八つの章とその内容について

先述したとおり「懐徳堂の成立」「懐徳堂の経営と教育」「懐徳堂の学問」「懐徳堂の周辺」「懐徳堂の終焉と復興」の五つの章では、歴史に沿って人物、事項、資料について解説する。例えば第一章二節「初期懐徳堂」冒頭の「懐徳」の項目では、語の由来について『論語』里仁篇の「君子懐徳、小人懐土」、『詩経』大雅皇矣篇の「予懐明徳」、『書経』周書洛誥の「王伻殷乃承叙、万年其永観朕子懐徳」の３つの説を挙げながら、学主や研究者の主張を解説している。なお、貴重資料約百点については、関係人物名、数量、外形寸法、懐徳堂文庫図書目録該当頁などがまず記されているので、基礎的な情報が整理されていてわかりやすく、実際の形状が容易にイメージできる。

第六章「懐徳堂文庫関係書誌情報」では、懐徳堂文庫の資料を閲覧する際に必要となる、書誌学の基礎項目を解説している。懐徳堂文庫の書籍は漢籍と国書に大別されるが、一般図書とは形態から異なっている上、抄本、版本、写本など区別があり、懐徳堂初心者にとっては利用するまでがまず難解である。書物の印刷、材料、体裁などの基礎知識を、懐徳堂資料を例に挙げながらまとめたこの章を一読すると、閲覧の助けとなるであろう。

続く「懐徳堂の名言」では、懐徳堂資料に記されている『論語』をはじめとした漢籍をふまえた数々の名言を、【学問・教育】【人生・道徳】【商・利】【その他】に分類して紹介する。初代学主三宅石庵が『論語』を講じた際の「成聖人も人、此方も人なり」など、現代にも通じることばについて、発言者や発言の経緯、込められた意味が詳細に記されている。

最後の章「懐徳堂関係施設」には、懐徳堂に縁のある寺院、図書館、文庫などの概要と懐徳堂の関わりについての情報が記載されている。

《本書の意義》

データベース構築から生まれた本書であるが、歴史に沿って構成され、詳細な情報が充

実した量でもって記されているため、データベース利用の手引書という位置づけにとどまらない、懐徳堂について知るための大きな拠り所となる書である。「読む事典」として、懐徳堂の奥深い世界へ読者をいざない、懐徳堂への理解に繋がるであろう。また末尾に懐徳堂年表、索引を備えており、懐徳堂文庫の関連資料を利用する前に参照したり、または資料を利用しながらこの事典に立ち戻ってみたりと、様々な活用法が考えられる。本書の制作によって厖大な情報が整理され、懐徳堂研究の進展がみられたことは明らかであるが、あとがきによると割愛された項目もあるということであるので、本書の内容からさらに進んだ懐徳堂研究の展開が期待される。（神野）

6．その他

『懐徳堂文庫圖書目録』

（大阪大学文学部編輯並発行、1976 年、445 頁）

懐徳堂文庫に関して、これまでに発行された唯一の包括的な図書目録。

収録資料の概要

本目録に収録されている資料群は、「懐徳堂記念会蒐集図書」（約 36000 冊）、「北山文庫」（吉田鋭雄（はやお）旧蔵書約 4000 冊）、「木間瀬文庫」（木間瀬策造旧蔵書幅 56 点）、「岡田文庫」（岡田伊左衛門旧蔵書約 6000 冊）から成る、約 46000 冊に及ぶ。

目録の構成

本目録の全体は大よそ「漢籍の部」「國書の部」の２部より構成されており、各部の末尾には「書名索引」が付されている。

「漢籍の部」の分類は、伝統的な「経部」「史部」「子部」「集部」の四部分類に続いて、更に「叢書部」と、清末以降に発行された図書に対して「新學部」が設けられており、実質的には六部分類となっている。分類細目について、「四部」は『京都大学人文科学研究所漢籍目録』、「新學部」は日本十進分類法に準じている。収録された各書籍については、撰者、刊年および刊行者などを簡明に注記し、旧蔵文庫名、巻数が記されている。合刻書や叢書の類には、その包括する書名が全て挙げられている。巻末索引の書名は、叢書ならびに叢書に準ずる書目の、それぞれ子目にも及んでいる。文字の排列は筆画数により、同画数の文字については『康熙字典』の部首順に従っている。

「國書の部」の分類は、基本的に日本十進分類法によっているが、蔵書の性格を反映して、独自の細目を立てている箇所もある。（例えば、「372　教育史」の「372.105　懐徳堂」など。）書名は分類項目ごとに五十音順に配列されている。収録された各書籍については、撰者、刊年および刊行者などの他、刊本・写本・活字本・影印本等の別を注記し、旧蔵文庫名、巻数が記されている。巻末索引の書名は、五十音順に配列されている。

「電子図書目録」の登場

なお、本目録は絶版となって久しいが、「WEB 懐徳堂」ホームページ上に「懐徳堂文庫電子図書目録」（http://kaitokudo.jp/06biblio/index.html）が公開されており、手軽に閲覧できるようになっている。本文は頁数から、索引は分類と画数または五十音から検索できる。また、関係者によって修訂情報を書き込むことができるようになっている。

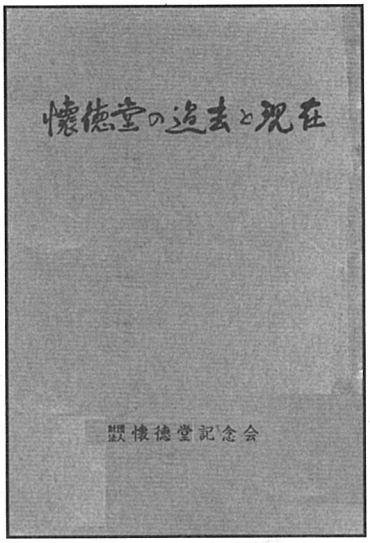
問題点と今後の課題

本目録の問題点をいくつか挙げるとすれば、懐徳堂文庫は、現在も資料受け入れを継続している「成長する」文庫であるため、本目録の編纂後に収蔵された貴重な資料（「中井家資料」「並河寒泉文庫」など）は、当然ながら収録されていない。また、インターネット上に公開されている「懐徳堂文庫電子図書目録」は、あくまでも本目録の画像データであるため、今後は目録情報をメタデータ化し、電子データベースの構築を目指す必要があ

ろう。

以上のような諸点を補ってゆく必要はあるが、今後も本目録が懐徳堂文庫の全貌把握と資料検索において、最も必要とされる情報源であることに変わりはない。　　（三谷）

『懐徳堂の過去と現在』



（大阪大学、1979年、62頁＋口絵4頁）

1953年に刊行された『懐徳堂の過去と現在』のリニューアル版。内容も新たに再編集され、懐徳堂の成立から懐徳堂記念会の活動に至るまでを、５つの章に分けて紹介している。木村英一氏・時野谷勝氏・脇田修氏・宮本又次氏が各章をテーマごとに執筆しており、懐徳堂沿革の大略が記されている。内容は以下のとおり。

懐徳堂と大阪大学（木村英一）

本章は、「現代」という時代に目を向けて、その激動の中で懐徳堂がどのような位置づけにあるかについて説いており、本書における序の役割を果たしている。本章では、人材の養成や学術の研究、社会の意識向上などに貢献した懐徳堂が、適正に理解されるべきであると強く主張される。

懐徳堂の沿革（時野谷 勝）

本章は、江戸期の懐徳堂を「草創」「中興」「焼失と再興」「中絶」の４つの時期に分けて概観している。主に経営面に着目して懐徳堂の変遷をたどっており、三宅石庵から並河寒泉にいたるまで、懐徳堂の運営に多くの人物の働きがあったことが示される。中でも懐徳堂の官学化や再建運動のために奔走した第四代学主中井竹山については、著書『草茅危言』の制作意図や松平定信との会談の経緯などにも言及しており、詳細な記述となっている。

懐徳堂の成立とその経営（脇田 修）

本章では、元禄期・享保期の社会状況を考慮した上で、懐徳堂の創設された意図と懐徳堂の運営方法とが示される。元禄・享保期には、経済発展に伴う社会不安を取り除くために儒教が普及したことが述べられ、懐徳堂と懐徳堂に大きな影響を及ぼした含翠堂とがこの基盤の上に成立したと論述する。また経営面については、掛銀や寄附・利子など資金に関する詳しい記述がなされ、それらの支援者として上層町人が懐徳堂の運営に深く関わっていたことが示される。

懐徳堂と大阪の町人たち（宮本又次）

本章は、懐徳堂の創設・運営に携わった五同志と、懐徳堂に学んだ経験を持ち町人学者として大成した富永仲基・山片蟠桃・草間直方らとを取り上げ、各人の略歴や懐徳堂との関連を記している。五同志に関しては主に経営面から、また大阪町人学者に関しては学術面から言及し、懐徳堂を取り巻く当時の環境を詳しく述べている。

今日の懐徳堂記念会（木村英一）

前章までの各章が、江戸期の懐徳堂に限って論述していたのに対し、本章では、明治期以降の懐徳堂にまつわる変遷が記される。時代の動向を考慮しつつ、大きく「記念会成立までの中絶時代」「重建懐徳堂の時代」「戦後の懐徳堂記念会の時代」の３期に分けて記述している。内容は、記念会の開催する古典講座、記念会役員の人事異動、また、記念会が大阪大学と協力して懐徳堂の復興・顕彰に努めてきた経緯について触れている。

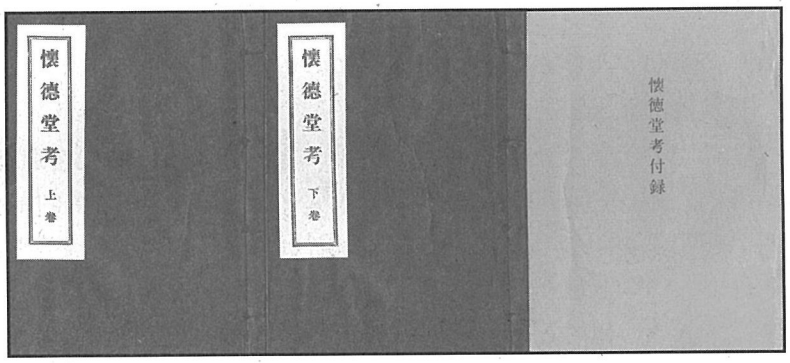
なお、口絵には、三宅石庵の書した「懐徳堂幅」や中井竹山・履軒の肖像画、懐徳堂の平面図などが掲載されている。巻末には編集担当者（執筆者不明）のあとがきが附され、この書が記された意図・経緯が窺える。

《本書の意義》

本書は、主に懐徳堂の経営面を中心にまとめられた書であり、懐徳堂の創設から衰退、戦後の記念会運営（昭和 50 年代まで）に至るまでの変遷を容易に通覧できるものとして有用である。小冊子ということもあって、紙幅の都合から大略のみを記すと明記されているが、各章とも前章を受けて、それを敷衍する形で論述されているため、一連の流れを看取できる。

なお、大阪大学へと継承された現在の懐徳堂文庫の状況については、別項『大阪大学の歴史』に詳しい。両書を併読することにより、十分な情報が得られるだろう。　（金城）

『懐徳堂考』



（西村天囚著、懐徳堂友の会、1984 年）

明治 43 年（1910）に発行された同書を復刻した、懐徳堂研究における基本的書籍の一つ。和綴じ本の『懐徳堂考』上下二冊及び懐徳堂考付録からなる。『懐徳堂考』の記述は、朝日新聞に連載されていたということもあってか、学術的視点はもとより、個々の人柄や逸話などにも富んでいる。なお、付録には大正 14 年に同書を重印した際に付けられた、重建懐徳堂の教授である松山直蔵の序と、竹山の肖像画や重建懐徳堂祠堂などの口絵とを載せ、また新たに『懐徳堂考』の人名索引を付している。

懐徳堂考上巻

上巻では、まず序説として大阪の文業が盛んであったこと、その中心が懐徳堂であったことを述べた後、西村天囚が資料を手にしたことにより、五井持軒・蘭洲父子から話を始めることをいう。

本篇では、持軒・蘭洲父子を中心に話を進めていく。最初に五井家について大阪最初の儒者であると紹介してから、持軒の学問や風貌性行、臨終の様子を描き、懐徳堂の初代学主である三宅石菴と持軒との関係を説明する。次に蘭洲についてその生い立ちを説き、その若い頃の友として中井甃庵を挙げて、甃庵の説明や、蘭洲と甃庵との関係について触れ

る。その後、享保の火事についてや石菴と含翠堂との関係を述べた後、懐徳堂の創立・学風・規約などを記している。そして石菴や二代目学主である甕庵の学問に触れた後、蘭洲について懐徳堂との関係や学問などを詳述している。そうして、最後に三宅石菴の子春楼や、五同志、富永仲基について触れている。また五同志以外の創立時の協力者については、氏名のみを挙げ、後世の研究を待つとする。

懐徳堂考下巻

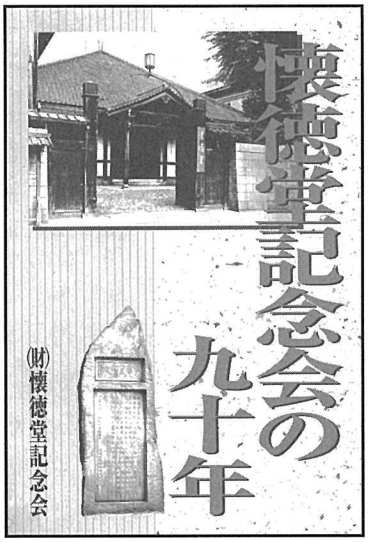
下巻では、まず上巻の概要を書き、その後中井竹山・履軒の兄弟を中心として、維新後の懐徳堂廃校までについて述べている。最初に兄弟の名前についてや、幼少時について、またその師匠について紹介している。そうして、竹山の説明に入り、懐徳堂の預人や学主としての功績、松平定信との会見、またその学問・尊皇思想・交遊・性格などについて広く記載する。そしてその子蕉園や、竹山の逝去・遺言について触れた後、天囚は、記録にこそ残っていないが、竹山没後に暫くは履軒が学主となっただろうとし、今度は履軒の説明を行っていく。その私塾である水哉館や、学問、書、工技、交遊・懐徳堂との関わりや、またその逸話について多く載せている。そして、履軒の次に、竹山の子であり履軒没後に預人兼教授となった、碩果について事略を記している。その後、並河寒泉や中井桐園について説明し、末期の懐徳堂の事跡や財政、そして廃校について述べる。そして廃校後の寒泉や中井氏に触れて終わる。

その後には補遺訂正と結語とが記されている。結語では、懐徳堂が大阪に対していかに裨益したか、また四世百四十余年に渡り続いたことがいかに誇るべきことか、また商業にいかに学問が大事か、などを述べている。

《本書の意義》

中井家の子孫である中井木菟麻呂の『懐徳堂水哉館先哲遺事』などを参照して書かれた本書は、懐徳堂研究の基本となる書の一つであり、その資料的価値は非常に高い。ただし、明治時代に書かれた書であるため、現代の人間にとってはやや難解な箇所も見受けられる。それでも、学術的価値は勿論、中井竹山・履軒兄弟の逸話など、俗耳を楽しませる情報も多く、入手し難いとはいえ、興味深い書籍であるといえる。　（竹村）

『懐徳堂記念会の九十年』



（懐徳堂記念会編、懐徳堂記念会、1999 年、165 頁）

懐徳堂記念会と懐徳堂友の会との一体化、及び懐徳堂記念会九十周年を記念して編まれた、懐徳堂記念会についての冊子。懐徳堂記念会及び重建懐徳堂についてが、豊富な写真資料を用いながら、詳細に述べられている。

一　懐徳堂記念会の沿革

本章では、幕末の動乱により閉鎖された懐徳堂が、明治末からの懐徳堂復興の気運によって再興された重建懐徳堂と、その記念会との歴史とを、数十点の写真や年表を活用しながら端的にまとめている。記念会を中心としているせ

いか、重建懐徳堂について記述するのにも、西村天囚や中井木菟麻呂ではなく、大阪の財界人に着目している。

二　懐徳堂記念事業の概要

本章では、事業内容一覧及び会務関係資料が記載されている。事業内容一覧では、春秋記念講座や古典講座などの「講座活動」、懐徳堂復刻叢書などの「出版事業」、シンポジウムなどの「研究・広報活動」、懐徳忌などの「懐徳堂顕彰活動」、見学会などの「会員親睦活動」といった、記念会の活動について網羅されている。また会務関係資料では、懐徳堂記念会と懐徳堂友の会との、会員名簿や役員名簿が載せられている。

三　懐徳堂の思い出を語る

本章では、重建懐徳堂に実際に通っていた人や、また講座を受講した人などの回想を載せており、実際にどういう活動が行われていたのか、その一端を窺うことができる。

《本書の特色》

懐徳堂記念会や友の会の活動について、これまでの活動をまとめた本冊子は、重建懐徳堂や懐徳堂記念会について知るために、無くてはならないものである。また、一章でも触れたが、重建懐徳堂について、西村天囚や中井木菟麻呂ではなく、大阪の財界人を中心に据えて見る視点は貴重である。三章の体験談からは、昔日の重建懐徳堂の雰囲気を味わうことができる。　（竹村）

執筆者紹介

三谷　拓也（大阪大学附属図書館職員）
金城　未来（大阪大学博士前期２年、中国哲学研究室）
竹村　渉（大阪大学博士前期１年、中国哲学研究室）
久保　宗之（大阪大学学部４年、中国哲学研究室）
神野　沙織（大阪大学学部４年、美術史研究室）
畑中　美春（大阪大学学部４年、中国哲学研究室）
藤野　風子（大阪大学学部２年、日本文学・国語学研究室）
森田　詠子（大阪大学学部２年、日本文学・国語学研究室）
福田　一也（大阪教育大学非常勤講師）

懐徳堂を知るための本
懐徳堂研究センター編

平成22年（2010）3月1日
大阪大学大学院文学研究科
懐徳堂研究センター
http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/
〒５６０－８５３２大阪府豊中市待兼山町１－５
大阪大学文学研究科

Graduate School of Letters
Center for Kaitokudo Studies